



アートであそぶ夏休み！×ムサビプロジェクト2019

記録冊子

子ども体験塾

「アートであそぶ夏休み！」を終えて

羽村 典洋

羽村市生涯学習部生涯学習センターゆとろぎセンター長

令和元年度、多摩・島しょ広域連携活動助成事業子ども体験塾「アートであそぶ夏休み！」にご協力をいただき誠にありがとうございました。

また、武蔵野美術大学の皆様には、企画から当日の運営まで幅広くお手伝いいただきましたことにつきまして、心より感謝申し上げます。

今回実施したイベントのうち展示企画のアートを遊ぶみんなの展覧会では、生涯学習センターゆとろぎ館内に学生の作品を展示していただき、当センターの雰囲気にはあった展示となりました。

そして、小中学生を対象としたギャラリートークでは展示した作品を前に説明を聞くことにより、作品制作のコンセプトなどがわかり、各々の作品の理解につながったと思います。

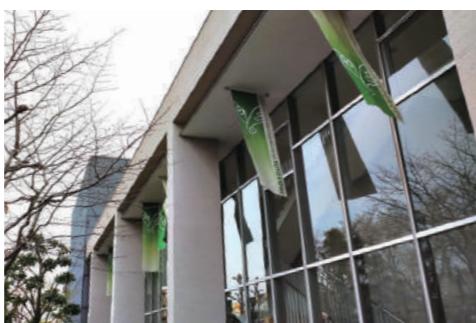
また、羽村市では初開催となる乳児とその保護者を対象とした赤ちゃんアート塾については、少人数でしたが、参加された方からは高い評価をいただきました。

その他、子ども達に人気であった、はむらアート恐竜ランドオリジナルのミニ恐竜をつくろうでは、多数の子どもたちが参加し、思い思いのオリジナル恐竜を楽しく作っていたのがとても印象に残っています。

みんなでハムラ・レックスをつくろうでは、ゆとろぎに来館された方が、様々なメッセージと一緒に恐竜の骨格にウロコをつけ、アート恐竜を完成させましたが、貸館事業と重なったこともあり、小学生以外の参加者が多かったことが残念でした。

今回、武蔵野美術大学と連携し様々な企画を実施しましたが、子ども達にはアートへ対する興味を促し、将来への夢や希望を育てる機会になると共に、夏休みの想い出の一つになったと思います。

今後は、今回の夏休み企画を契機に、武蔵野美術大学とさらなる連携につながることを祈念いたします。



○ 概要

令和元年度 多摩・島しょ広域連携活動助成事業 子ども体験塾
アートであそぶ夏休み！

期日：2019年8月2日（金）～8月12日（月・休）

主催：青梅市・羽村市・瑞穂町 子ども体験塾実行委員会

協力：株式会社CANVAS、武蔵野美術大学

会場：羽村市生涯学習センターゆとろぎ ほか

アートであそぶ夏休み！×ムサビプロジェクト

展覧会「アートを遊ぶみんなの展覧会」・鑑賞プログラム・造形ワークショップ

会期：2019年7月23日（火）～8月25日（日）

会場：羽村市生涯学習センターゆとろぎ（東京都羽村市緑ヶ丘1-11-5）

○ もくじ

- 2 多様性を持った「アートであそぶ夏休み！×ムサビプロジェクト」の概要
- 3 プログラムの記録（1）アートを遊ぶみんなの展覧会
- 6 作品紹介
- 34 作品テーマ・コンセプト
- 39 プログラムの記録（2）鑑賞プログラム／造形ワークショップ
- 44 準備・実施ドキュメント
- 46 広報・配布物とキャブション・パネル
- 47 論考 プロジェクトをふりかえって — その成果と課題
- 56 謝辞

[凡例]

- ・ 本記録冊子は、令和元年度多摩・島しょ広域連携活動助成事業子ども体験塾「アートであそぶ夏休み！」の一環として開催された「アートであそぶ夏休み！×ムサビプロジェクト」による展覧会「アートを遊ぶみんなの展覧会」・鑑賞プログラム・造形ワークショップの記録・成果・課題をまとめたものである。
- ・ 出品学生・学生スタッフの学年、関係者の所属等は、「アートであそぶ夏休み！」実施当時のものである。
- ・ 大学院生の出品者・スタッフの所属は「武蔵野美術大学大学院修士課程造形研究科美術専攻○○コース」であるが、場合によって「造形研究科」等を省略して表記した箇所がある。
- ・ 作品紹介で図版とともに掲載した出品作家の文章は「子どもたちへのメッセージ」であり、展示において作品横にパネル掲出したものである。図版のあとにまとめて収載した「作品テーマ・コンセプト」は会場で配布した出品作品目録に掲載したものである。
- ・ 3、40-45ページの執筆は春原史寛が担当した。46ページの執筆は佐久間茜が担当した。

多様性を持った

「アートであそぶ夏休み！× ムサビプロジェクト」の概要

— 官学連携による小中学生への美術教育と、
大学の活動成果報告と学生の実践的学び場としての可能性を考えるための記録冊子

春原 史寛

本プロジェクト企画者・武蔵野美術大学造形学部芸術文化学科准教授

多摩・島しょ広域連携活動助成事業・子ども体験塾「アートであそぶ夏休み！」は、青梅市、羽村市、瑞穂町が開催した事業です。武蔵野美術大学では本年度、当事業に協力し、小中学生が「アート」を実感して楽しむことのできる「アートであそぶ夏休み！× ムサビプロジェクト」として、展覧会や鑑賞プログラム、ギャラリー・トーク、造形ワークショップを、大学の社会連携事業として実施しました。

この冊子は、プロジェクトの準備・実施状況を記録し、その成果と課題を考えるために作成されました。美術館ではなく、より地域市民の日常に近い生涯学習センターの空間やシステムを活用し、その場や人々と連携して、美術大学がどのような役割を果たすことができるのか、また、このようなプロジェクトを通じて大学の学生や教員や職員にどのような学びがあり得るのか、それらの可能性を考えるために資料になれば幸いです。

さて、展覧会「アートを遊ぶみんなの展覧会」は、アート自体を「遊ぶ」ことで、鑑賞し、楽しみ、作品や作品を介したコミュニケーションを通じて新たな文化的価値を発見することを目指して企画しました。ゆとりの建物をめぐって歩き回り、ふいに作品に出会って、見て、話して。アートを遊んで。展示では美術・デザインの専門大学である武蔵野美術大学・大学院の学生を中心とした、40名の多様な日本画・油絵・版画作品を紹介しました。アートにはそれを見る人の数だけ異なる見方の可能性があります。様々な表現内容や形、色などから、自分が興味を持つ作品を見出し、どこになぜ自分がひかれたのかを探って新たな世界や自分を見つけ出すといった楽しみ方、すなわち、遊び方を提案しました。

そして、子どもたちにとって、学校の図工・美術科の授業で触れてきた造形文化とのつながりや違いを感じながら、美術大学におけるアート、つまり社会におけるアートのありかたのひとつのかたちを味わってもらうことが、充実した夏休みの良い思い出になることを目指しました。また、子どもに限らずにさまざまな方々「みんな」が、アートに触れる子どもたちの姿を通じて、アートの可能性を感じ取っていただけたのではないかと思う。

本プロジェクトの実施にあたり、羽村市生涯学習センターゆとり、青梅市、瑞穂町、武蔵野美術大学日本画学科研究室・油絵研究室・版画研究室の教員・スタッフ・学生各位をはじめとした多くの方々のご協力をいただき、運営には芸術文化学科研究室各位にご参加いただきました。厚く御礼を申し上げます。

アートであそぶ夏休み！× ムサビプロジェクト運営組織

企画・統括：春原 史寛（武蔵野美術大学造形学部芸術文化学科准教授）

運営・支援：北嶋 勇佑（芸術文化学科研究室助手）、板橋 孝浩・佐久間 茜・海老沢 晴子（武蔵野美術大学社会連携チーム）

印刷物・展示パネル・サインデザイン：佐久間 茜

展示協力：楫 義明（芸術文化学科教授）

出品協力：武蔵野美術大学造形学部日本画学科研究室・同油絵研究室・同版画研究室

造形ワークショップ・鑑賞プログラム講師：辻 蔵人（造形作家）、杉浦 幸子・米徳 信一（芸術文化学科教授）

学生ボランティア・スタッフ（芸術文化学科・大学院芸術文化政策コース）：阿部 稔香、池戸 瑞葉、飯盛 翔太、石橋 彩、

井上 奈緒、井 梨緒奈、大西 瑞夏、大山 りつ、岡田 美里、岡本 理咲、加納 向日葵、川口 春佳、車塚 真子、コウ・ペイラン、

佐野 菜子、島崎 夏乃子、シュー・チョウグン、白土 若奈、関口 詩乃、芹田 美羽、高木 楓、田中 美咲、寺本 格、西村 茉理子、

宮内 美咲子、山口 衣織

○ プログラムの記録（1）

展覧会

アートを遊ぶみんなの展覧会

会期： 2019年7月23日（火）～8月25日（日）9:00～22:00 開館30日間

会場： 羽村市生涯学習センターゆとり館内各所

地階：ラウンジ、小ホールホワイエ 1階：大ホールホワイエ

2階：学習ラウンジ、会議室・学習室前通路

3階：大ホール2階客席ホワイエ、保育室前通路、創作室2展示ケース

料金： 観覧無料

展示作品数：40作家・46点

配布物： みんなのための遊び方ガイドブック（A5・11頁）、

出品目録・制作意図（A3両面）

スタッフ： 展示作業 教員2名・助手1名・学生17名（芸術文化学科）

撤収作業 教員1名・助手1名・学生5名（芸術文化学科）

武蔵野美術大学・大学院の、油絵・版画・日本画を学ぶ学生たちの優れた作品46点をご紹介する「子ども体験塾」のための特別な展覧会です。アートと子どもたちをつなぐ『遊び方ガイドブック』を持って、さまざまな表情を持つ「ゆとり」の建物にも注目しながら、子どもたちの日常に登場したこの「美術館」を巡れば、作品や誰かと語り合うアートの楽しみ方が実感できます。その遊びの延長にあるアートの体験が、日常の風景やいつもの生活のなかの気づかなかった面白さとの出会いとなりました。

また、小学校図工・中学校美術の授業とは通じる部分を持ちつつも異なる、美術大学で専門的にアートを学ぶ学生の作品から、子どもたちが普段出会うことの少ないかもしれないアートで生きる「アーティスト」の活動に思いを巡らせる機会となることを目指しました。

出品者

学部日本画学科・大学院日本画コース

内村 茉梨佳、大石 日向子、小俣 花名、川口 瑞菜、齋藤ワヤン恵衣美、鈴木 志歩、辻 美紅、富田 凪、中川 美貴、中里 みのり、向井 楓、八木 完

学部油絵学科油絵専攻・大学院油絵コース

キンマキ、楠本 未来、児玉 菜々子、小寺 創太、下山 黎海、鈴木フィオナ知子、田岡 智美、名幸 英美、平子 暖、深田 桃子、松河 直美

学部油絵学科版画専攻・大学院版画コース

飯島 まり子、岩下 美里、海野 幸太郎、大塚 美穂、木内 あかり、古賀 慧道、周昊、鄧皓雲、鈴木英里子、閔 莉瑚、閔田 橋、TAO QIANQIAN、富永 華苗、中村 朝咲、早川 佳歩、古屋 真美

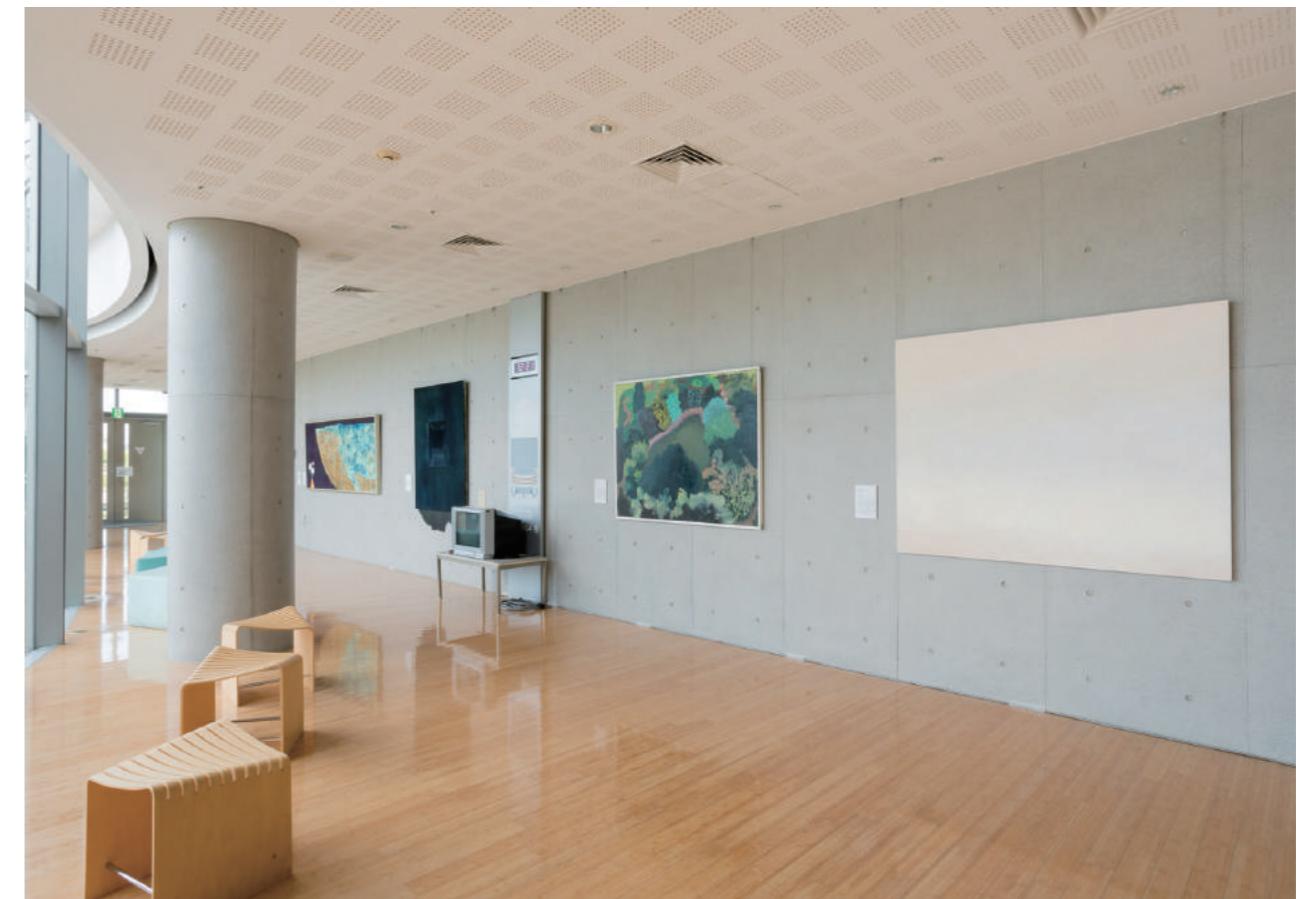
特別出品

北嶋 勇佑（芸術文化学科研究室助手）

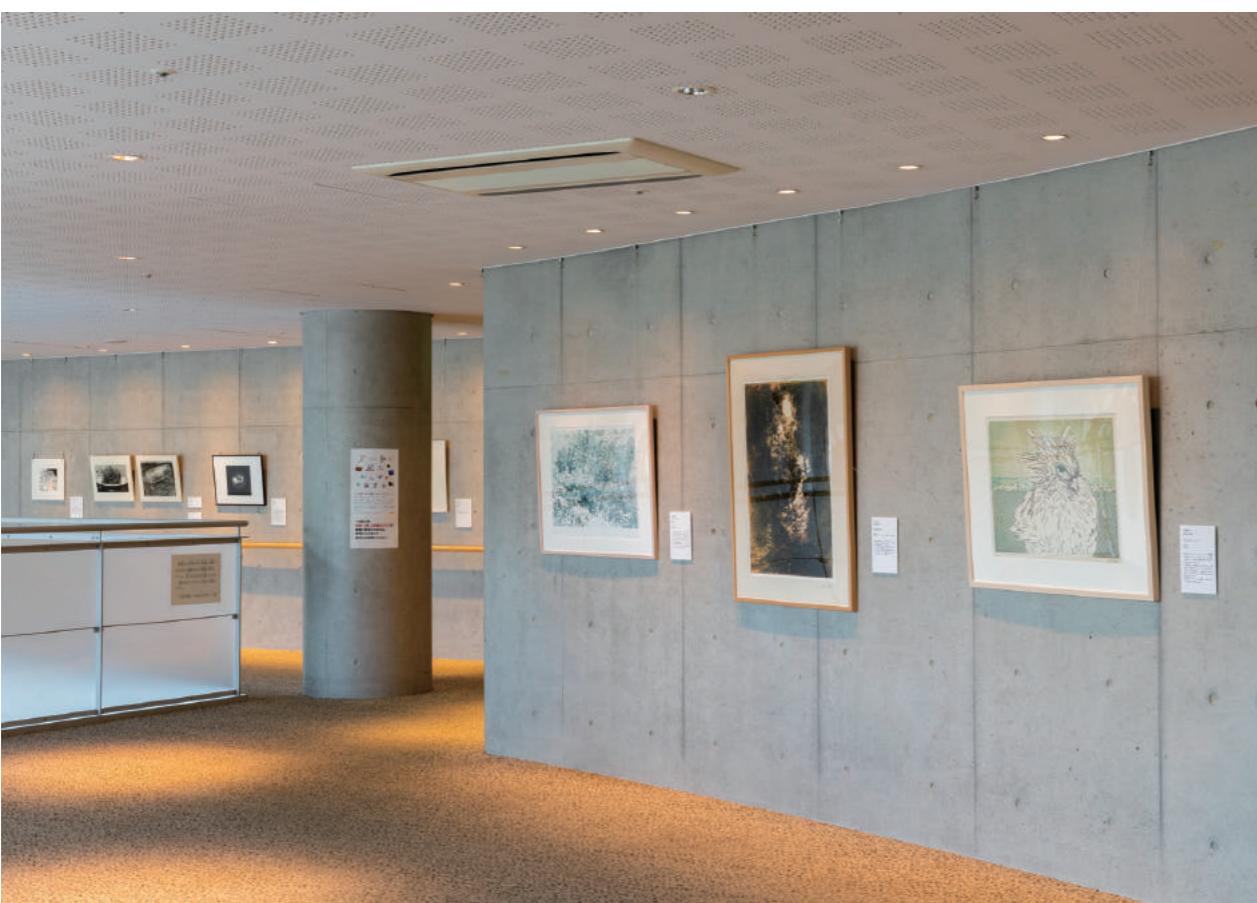
作品紹介 (P.6～)



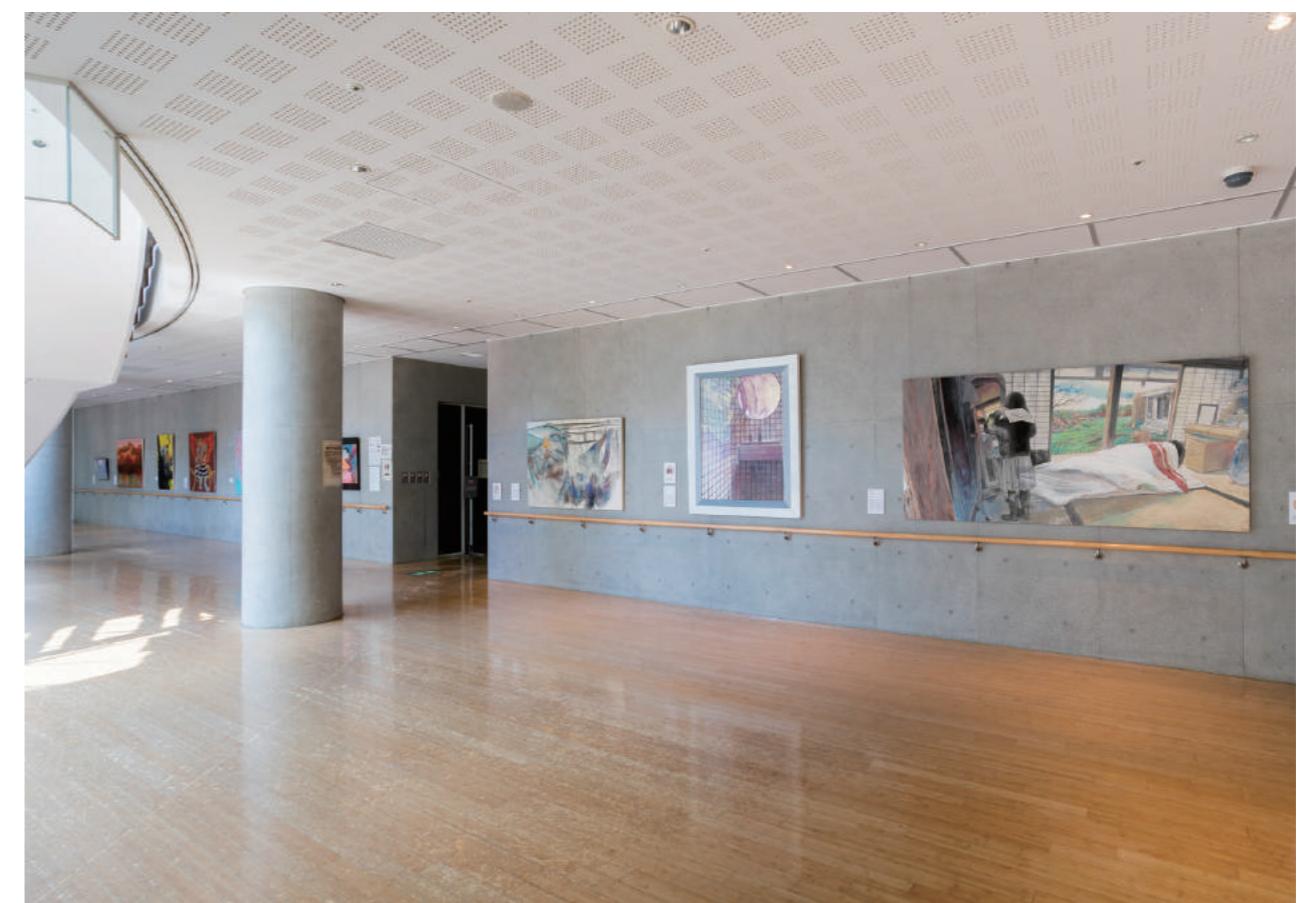
1階



3階



2階



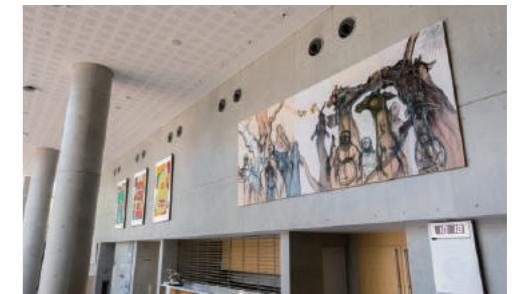
地階



1 動物

日本画
2019年
180.0×450.0cm

でかけるときはいつも絵を描くどうぐをもって行きます。えんぴつ、ねりけしごむ、クリップボードにコピーようしをはさんだもの、クレヨンなどです。ぜんぶはそろっていなくても、えんぴつと紙があればなんとかなります。
どうぶつえんや、すいぞくかん、家のちかくのこうえんなど、いろいろなところに行きます。さんぽをしながら描きたいけしきをさがします。たくさん描けることもあります。なにも描けずに帰ることもあります。あんまりうまく描けないこともたくさんあります。
つらいことやたいへんなことがあっても、好きなことができる生活をみんなができるようにがんばっています。



川口 瑞菜

1996年東京都生まれ。武蔵野美術大学造形学部日本画学科卒業。現在同大学院修士課程美術専攻日本画コース在学。2017年日本画とイラスト展示「Beautiful Life」。2018年日本画とイラスト展示「Beautiful Life2」、日本画学科有志展「ROOTMAP」。2019年「武蔵野美術大学卒業・修了作品展」優秀賞。



2 朝ご飯

日本画（紙本彩色）
2019年
180.0×150.0cm

《出品作品について》
リビングの奥の窓からの光がきれいだと思い描きはじめました。窓からの光と、家の朝ご飯の雰囲気を感じただけたら嬉しいです。
《素材について》
普段は絵の具をたくさん使いカラフルな作品を作っています。今回はほぼ初めてのモノクロの作品になりました。始めはカラフルにしようと思っていたのですが下書きのつもりで描いていた墨の表情が面白いと思い、そのまま全部墨で描くことにしました。
《全体的な制作についての考え方》
作品が完成に近づくと自分の中の無意識な意思や意見が形になって、人に対するメッセージに変わっていく気がします。それが楽しくて絵を描いています。



小俣 花名

1997年東京都生まれ。2019年武蔵野美術大学造形学部日本画学科卒業。現在同大学院修士課程美術専攻日本画コース在学。2016年中札内美術村企画公募展「二十歳の輪郭」最優秀賞。2018年江戸表具研究会・表装会20周年特別企画「掛け軸と絵画のミライ展」、「三菱商事第41回アート・ゲート・プログラム」入選。

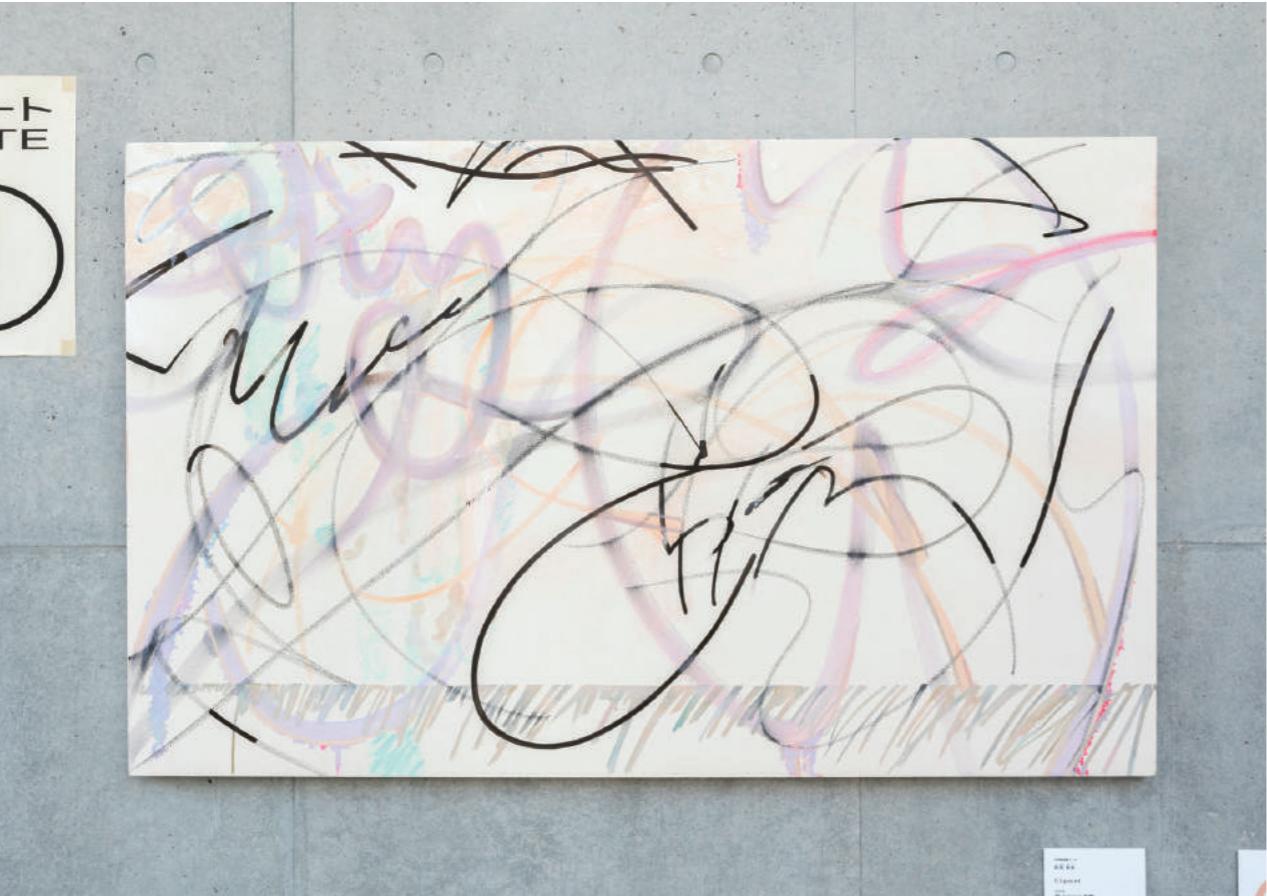
3 薄いカーテン

油彩・キャンバス
2019年
162.0×140.0cm

身の回りにあるようなものを描いています。そのものを見ながらではなくても描くことができるようなものこそ描こうと考えていて、そのようなものを組み合わせて場所や状況を作り出しています。そのため、実際にあるものや場所を描いているわけではありません。「薄いカーテン」は、チューリップ柄の薄いカーテンが窓に掛かっている絵です。布の向こうにあるものが透けて見える様子を描きました。身の回りにあるようなものを描いていると、かくかくした形の物が多いと気がつきました。そんな中、布は柔らかく、しわやひだができます。布から透かしてかくかくしたものをかくと、布の質感に沿ってゆがめて描くことができ、それが良いと思っています。

下山 黎海

1996年神奈川県生まれ。2019年武蔵野美術大学造形学部油絵学科油絵専攻卒業。現在同大学院修士課程美術専攻油絵コース在学。



4 Clipaint

油彩、オイルパステル・厚口綿布

2019年

92.0×148.8cm

私は原宿ファッショのコーディネイトの文化について興味があり、制作しています。原宿のファッションのような様々な系統の服を着合わせていてもファッションとして成立し、そのコーディネイトは自らの個性を一番身近に発信できる道具になります。私は意外なものどうしを組み合わせたりする原宿のファッションの部分やコーディネイトにおける感覚を絵画で表現しようと試みています。制作は絵を描くだけではなく、ものを作るにあたって色々なものを調べたり取り入れたりします。普段からファッションのことを見たり考えることが制作に繋がっている気がしています。

田岡 智美

1995年千葉県生まれ。2019年武蔵野美術大学造形学部油絵学科油絵専攻卒業。現在同大学院修士課程美術専攻油絵コース在学。2019年「平成30年度卒業制作展」優秀賞、前田常作賞。「第33回ホルベインスカラシップ」奨学生。

4



5 take a side trip

銅版画

2018年

80.8×100.8cm

小さい頃から絵を描くことが大好きでした。鉛筆、シャープペン、色鉛筆、アクリル絵の具、油絵、そして版画にたどり着き、今は銅版画で絵を描いています。

飯島まり子

1994年東京都生まれ。武蔵野美術大学造形学部油絵学科版画専攻卒業、現在同大学院修士課程美術専攻版画コース在学。2018年「平成29年度武蔵野美術大学卒業制作展」研究室賞、「IAG AWARD 2018」大賞。

5



6 跳つてみたいだけ

リトグラフ・雁皮紙

2018年

97.0×64.0cm

衣服をモチーフに、好きなものや忘れないこと、自分に起きた出来事を思いながら、制作するようにしています。衣服は自分にとってそれらを記憶する、または想起するひとつの媒体です。自分の身体だけでは抱えきれないさまざまな出来事を、束ねてくれるものもあると思います。直接的に表現された個人の記憶は生々しく、とても重たくて、見る人によっては息苦しさを感じることがあると思います。そこで、版画の技法を用いてフラットに刷りとることで、個人的な場所から少し距離を置いたものにするように心がけています。

古屋 真美

1994年山梨県生まれ。2018年武蔵野美術大学造形学部油絵学科版画専攻卒業。現在同大学院修士課程美術専攻版画コース在学。2018年「古屋真美展」(JINEN GALLERY)、「International Lithography Days」(ドイツ・ミュンヘン)、「TRANSLATION OF 3 VISIONS OF PRINTMAKING」(タイ・PSG Art Gallery)、版画コース院1展「to king」(文房堂ギャラリー)。

7 夜に閉じ込められた

リトグラフ

2019年

19.0×30.0cm

自分が普段から考えているとりとめのないことを、いかに面白く綺麗に表現できるか日々挑戦しています。

版画は自分の思い通りの作品を作ることが難しいです。

自分が思った以上の作品を作ることが出来る場合があれば、思い描いていたよりも残念な作品が出来上がる場合もあります。

今回の作品は、今までのなかで一番綺麗に刷ることができた作品です。

武蔵野美術大学には、自分がやりたいと思った表現を叶える設備と制作方法や展示についてアドバイスをくださる先生方がいます。

将来美術の道に進みたいと思い、大学で学びたいと思ったら武蔵野美術大学に入ることをお勧めします。

関 萌瑚

2018年武蔵野美術大学造形学部油絵学科版画専攻卒業。現在同大学院修士課程美術専攻版画コース在学。2017年鈴木あかね・関萌瑚 2人展「lost article」(ギャラリー子の星)、「第42回全国大学版画展」(町田市立国際版画美術館)。2018年「平成29年度武蔵野美術大学卒業・修了制作優秀作品展」(武蔵野美術大学美術館)、「第12回大学版画展受賞者展」(文房堂ギャラリー)。



8 山と紙

銅版画

2019年

25.0×25.0cm

沈黙を通じて詩歌の美感を表現したい。

このシリーズの作品は、材質、空間、光影の対比を通じ、ある劇の沈黙の雰囲気を表現する。紙飛行機が墜落する瞬間、紙鶴が倒れる瞬間、船が沈む瞬間では、時間は凝固した瞬間であり、永遠の沈黙でもある。

私の考えでは、「沈黙」は存在しないものに見えるが、実は存在している。「静けさ」とは異なり、「沈黙」は私達が選んだ状態で、感情が含まれているが表現したくない状態である。沈黙の中で爆発しなければ、沈黙の中で滅びるので。「沈黙」は「近い未来」の状態である。確かに存在しており、爆発か滅びるかを、貴方は予測できない。この複雑な擬態の下で、生まれつきの詩の美しさがある。

鄒皓雲

1996年中国・上海生まれ。2014年上海視覚学院付属学校普通美術卒業。2017年上海半島版画スタジオ卒業。2019年武蔵野美術大学大学院修士課程美術専攻版画コース入学、現在在学。2016年「第6回上海大学生版画展」銀賞。2017年「国際芸術設計展」優秀賞。2018年「第6回中国美術展」入選、「第9回上海美術展」入選。



9 踏まれた夜は枯葉の音がした

水性木版・和紙

2019年

22.5×8.0cm 等

楽しいと思えることを細々とやっていけたら幸せなんだろうなと思います。

岩下 美里

1995年山梨県生まれ。武蔵野美術大学造形学部油絵学科版画専攻卒業。現在同大学院修士課程美術専攻版画コース在学。



10 「BRn」「Dit」

リトグラフ・紙

2018年

各 30.0×30.0cm

私は鉱物が好きで、宝石（品質の良い鉱物をジュエリーにするためにカットしたもの）は遠いものではないのですが、鉱物そのものの自然から生まれたままの表情に、特に神秘を感じています。

難しい事はあまり考えないで、自分の絵がこういう色になったら良いな、見ていて気持ちのいい物になったら良いなと思って制作をしています。

アクリルボックスに入れているのは、鉱物標本（小さな石をケースに入れてコレクションする物）の雰囲気を出したいと思って作ったシリーズです。

色付きのインクを使うのがとても好きなので、私の作品を見て「版画って白と黒だけじゃないんだ！」と思ってもらえたなら嬉しいです。

関田 橋

1996年東京都生まれ。2019年武蔵野美術大学造形学部油絵学科版画専攻卒業。

現在同大学院修士課程美術専攻版画コース在学。2016年アートチームA歩還グループ展「iki展」。2019年「My book, My design vol.10」(フリュウ・ギャラリー)。

10



11 A LITTLE EXCELLENT

シルクスクリーン、写真

2018年

62.0×49.0cm

美術と出会ったのは中学生の時です。学校に行っていなかったのですが、暇な時間に描き始めた絵にのめり込みました。大学に進学する前、もう美術はやめようと思っていたしました。そのために旅をしていました。

ドイツを旅していた時に人種差別に初めて会いました。電車に乗ればゴミを投げつけられ、道を歩けば大勢に道を塞がれました。

そんな時に、美術館で見た作品に感動しました。美術にはたまにそんな力があります。それで現在も美術をやっています。

僕の作品は、シルクスクリーンという技術で印刷された写真です。いつも見ている風景でも写真で撮ると違って見えるのが面白いと思っています。

海野 幸太郎

1994年大分県生まれ。現在武蔵野美術大学大学院修士課程美術専攻版画コース在学。

12 無題

エンブレービング・紙

2019年

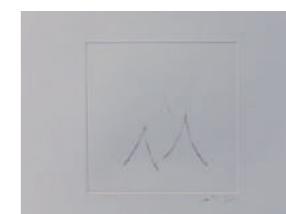
53.5×39.0cm

山、工事現場のカラーコーン、とげとげ、波…
色々なものに見えるかもしれません。

いつも見ている風景のなかに面白い形はたくさんありますね。

早川 佳歩

1996年愛知県生まれ。2019年武蔵野美術大学造形学部油絵学科版画専攻卒業。
現在同大学院修士課程美術専攻版画コース在学。



11

12

12

13



13

13 noise

ドライポイント
2018年
86.0×54.0cm

たとえば、光ってどうやって生まれるんだろう、とか、木はどうしてこういう形をしているんだろう、とか、ふとした瞬間、不思議だなと思ったことや、なんとなく気になること、そういう事を考えたり、思ったりしています。

中村 朝咲

1996年神奈川県生まれ。現在武蔵野美術大学大学院修士課程美術専攻版画コース在学。「武蔵野美術大学 卒業制作展」優秀賞。



14

14 untitled

銅版画
2018年
40.0×60.0cm

動物のように見えるもの、人のように見えるもの、何かに見えるものを描いていますが、本当はそう見えているだけなのかもしれません。自分の好きなものを描いていくと、あるところから、そのものらしさが変わっていくような気がします。よく分からなさや、何なんだろうという心にひっかかるものが残せればいいと思います。

大塚 美穂

2019年武蔵野美術大学造形学部油絵学科版画専攻卒業。現在同大学院修士課程美術専攻版画コース在学。2018年「国際ミニプリントトリエンナーレ」入賞、「全国大学版画展」受賞、「国際瀧富士美術賞」優秀賞。



15

15 ワンダーバード

水性木版
2018年
53.0×67.0cm

今回出展させていただいた、「ワンダーバード」は動物園で出会ったヘビクイワシという鳥のまなざしに惹かれ制作した作品です。この作品には私が感じた彼女への思いを十分に刻み込めたと考えています。人と会話をすることが得意ではなかった自分にとって、絵を描くことは他者とのコミュニケーションを取る手段のひとつでした。今でも自分とアートとの関わり方は変わらず続いている、自分の感じたことを一番詳しく伝えられる方法だと信じています。作品を見ていただいて、少しでも愛らしいと感じていただけたのならばとても嬉しい思います。

鈴木 英里子

1995年神奈川県生まれ。2018年武蔵野美術大学造形学部油絵学科版画専攻卒業。現在同大学院修士課程美術専攻版画コース在学。2016年「第50回記念かわさき市美術展」優秀賞。2018年グループ展「TRANSLATION OF 3 VISIONS OF PRINTMAKING」(シラバコーン大学)。「武蔵野美術大学卒業・終了制作」研究室賞、「第7回 FEI PRINT AWARD」準大賞。2019年グループ展「バベルマヒカ 版と線のちから」(サンアグズティン・アートセンター)、「第24回鹿沼市立川上澄生美術館木版画大賞展」入選。



16

16 木洩れ日の木洩れ日の木洩れ日

銅版画（フォトエッチング、エッチング、
アクアチント、緑青刷り、ハーネミューレ紙に雁皮刷り）
2018年
101.0×75.0cm

「美大に進学する意味」がわからず、悩む人もいるかもしれません。進学する前にわかる情報はとても限られていて、さらに誰かの先入観や主觀によってひどく歪曲させられてしまっていることもあります。実際に進学してみるとわからないことがあります。設備や人がいる空間に身を置かないと、広がらない視野があります。「美大に進学する意味」は、進学したあとに少しづつわかってくるものだと思います。

古賀 慧道

1994年東京都生まれ。2018年武蔵野美術大学造形学部油絵学科版画専攻卒業。現在同大学院修士課程美術専攻版画コース在学。2018年「第11回大野城まどかあ版画ビエンナーレ」展、「THE FACTORY」展、「第43回全国大学版画展」、「to king」展。2019年「第18回南島原市セミナリヨ現代版画展」。



17-1 豆苗

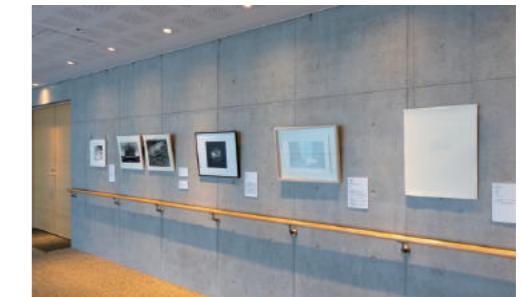
銅版画
2019年
23.0×36.0cm

17-2 1.5Lのプラスチック瓶

銅版画
2019年
28.0×36.0cm

周昊

1987年中国・山東省生まれ。2012年中国美術学院版画専攻卒業。2015年中国美術学院大学院版画専攻修了。2019年武蔵野美術大学大学院修士課程美術専攻版画コース入学、現在在学。2010年中国美術学院版画専攻優秀スケッチ賞受賞。2012年中国美術学院優秀卒業作品銅賞受賞。2014年「詩意家居 杭州(中国)居室版画展」。



17-1 17-2

18 A.M.I.T.W1

エッティング
2016年
40.0×35.0cm

この世界にもう一つの私があるのか?
私は疑問を持って、この絵を描いた。
女の子はキノコの森に入っていって、もう一つの自分に出会った。
彼女たちは苦楽を共にしていた。悩みはだれにでもある、楽は自分で探すべきだ。
悩み事があれば、キノコの森に入って、もう一つの自分を探しましょう。

TAO QIANQIAN

2016年中国湖北美術学院版画専攻卒業。現在武蔵野美術大学大学院修士課程美術専攻版画コース在学。2015年「第1回中国版画芸術展」入選。2016年「中国電子書籍展」入選。



19 野

銅版画（エッティング）
2019年
45.0×65.0cm

私は日常の中で見た風景を描くことを通して、自分の考えたことや感じたことを表現しようとしています。なぜそんなことをしているのかというと、日々の経験から感じたり考えたことの中に、大切にしたいと思うことがあって、それを取りこぼしてしまわないように刻んでおきたい、と思ったことが理由の1つです。
子どもの時の経験や感情は、大人になってからの自分の土台になっていることもあります。自分の感じることを、大切にしてほしいと思います。

木内 あかり

1995年千葉県生まれ。2018年武蔵野美術大学造形学部油絵学科版画専攻卒業。現在同大学院修士課程美術専攻版画コース在学。2018年「神山財団芸術支援プログラム」奨学生。2019年「第17回千葉市芸術文化新人賞」奨励賞受賞。

18

19



20 52Hz

日本画（岩絵具、水干絵具、銅箔、洋金箔、腐蝕液、いぶし液）

2019年

100.0×240.9cm

クジラと私の話

52Hzのクジラは誰にも姿を見られたことがなく、他のクジラの周波数と違うために、コミュニケーションが難しいとされている。だが、クジラもきっと何か伝えたがって鳴いているはずだ。私自身も表現したいことがあって、描いている。それでも、うまく伝えられないこともある。どんなに手を尽くしても報われないことや、伝えたいことが伝わらずに歯がゆい気持ちになることがある。やりきれない思いに涙しても、そこからきっと花咲くことを信じている。あきらめずにいたいと思っている。



辻 美紅

1997年広島県生まれ。2017年武蔵野美術大学造形学部日本画学科入学、現在在学。2018年「残滓を集めて 辻美紅、西村えり花 日本画展」(しきがねギャラリー)、日本画学科2年生有志展「萬々」(寺町美術館+ギャラリー)。2019年日本画学科2年有志展「墨縁をゆく展」(ギャラリースペースしあん)、日本画学科有志展「草節」(国立コートギャラリー)、「ピックウエスト学生フェスティバル美術展」(八王子東急スクエアビル)。

20



21 Soda

日本画（麻紙）

2019年

162.0×130.3cm



22 葬儀

油彩・パネル

2018年

168.0×91.5cm

「SODAは無理やり二酸化炭素を入れた男女、ブドウが買った焼き菓子のイチゴ、3杯酢は、酢と醤油とみりんを混ぜた女の子とお花と猫。ウイスキーを飲み、無価値の必要性と交差する思考の中で冷蔵庫を開き、鼻が点の平たい顔のキラキラした目を潰すSNSの薬。」この言葉の意味が絵のどこにあるのか探してください。他の人は自分とは違うところで違うことを考えているかも知れません。

向井 梶

2017年武蔵野美術大学造形学部日本画学科入学、現在在学。2016年「二科展」入選。2017年・2018年個展(YK's ber)。2018年グループ展(寺町美術館)、「ふじのくに芸術祭」入選。

深田 桃子

1996年神奈川県生まれ。2019年武蔵野美術大学造形学部油絵学科油絵専攻卒業。現在同大学院修士課程美術専攻油絵コース在学。2018年「第41回三菱アートゲートチャリティーオークション」出品。2019年カルフォルニア大学サンタバーバラ校内グループ展「irrational memographies」、日米文化会館グループ展「Points of departures」、個展「夢を見ながら目を開けろ」(gallery b.tokyo)。

21

22

18

19



23 心づもり

油彩・キャンバス

2019年

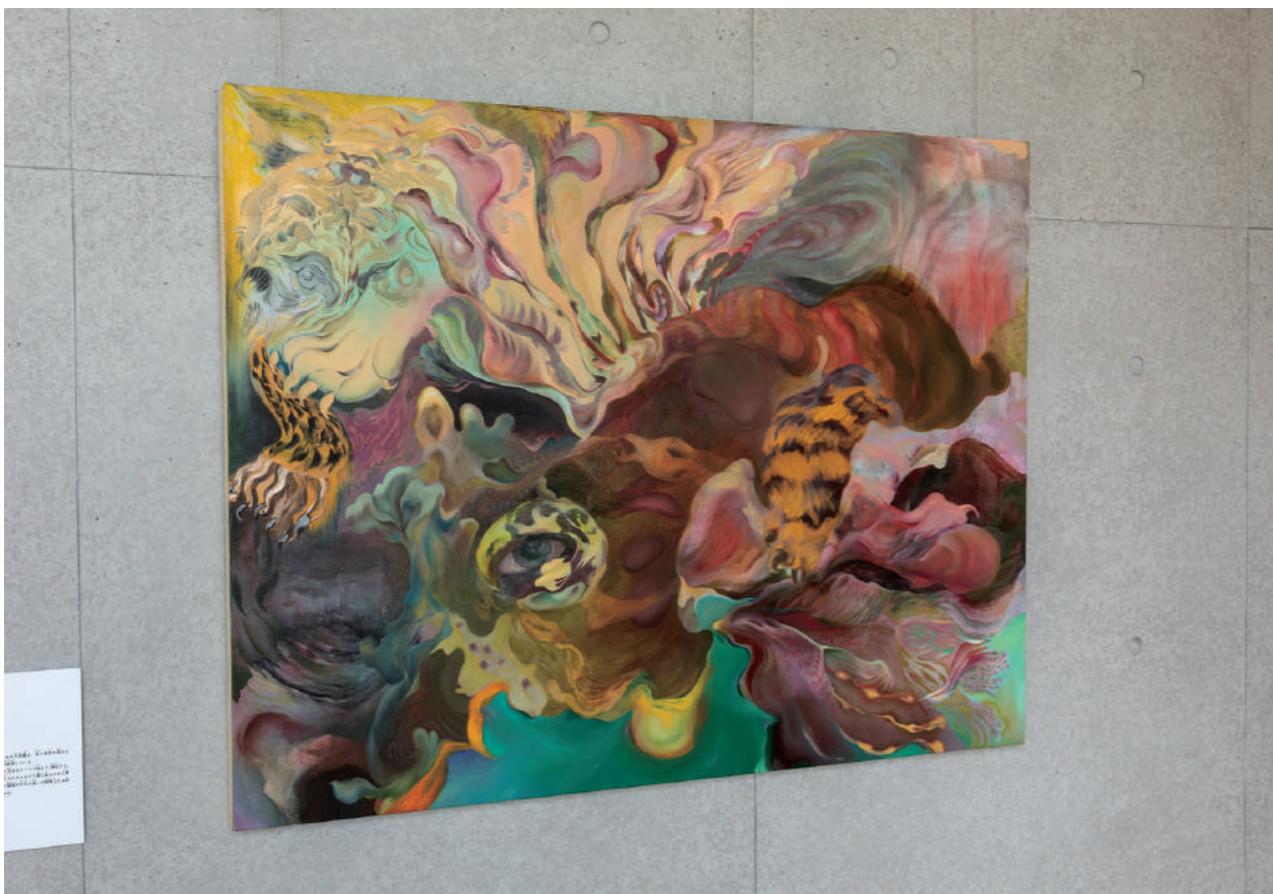
130.0×162.0cm

この作品は、私が海へ行った時に出会った風景と大気を描いたものです。なぜこの絵が白いかというと、私の見た海は朝が来たばかりで白く優しく光っていたからです。また、この絵では白い絵の具を5種類使っていてそれらを使い分けることで空気の微妙な変化を表現しています。一つしかないと思っていることでも、実はたくさんの仲間がいることがあります。例えば、クワガタにもヒラタクワガタやミヤマクワガタなどたくさんの仲間があります。それは、色も同じでそれぞれの色に仲間がいます。もしも、画材屋さんへ行く事があったら自分の好きな色の仲間を探してみましょう。きっと新しい発見があるでしょう。

松河 直美

神奈川県生まれ。武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業。現在同大学院修士課程美術専攻油絵コース在学。2018年協定校（パリ国立高等美術学校）プロジェクト「見えるもの・見えないもの、物・靈」（武蔵野美術大学）。2019年「平成30年度第42回東京五美術大学連合卒業・修了制作展」（国立新美術館）。

23



24 めぐり

油彩・キャンバス

2019年

91.0×117.0cm

「生命の循環」

通常目には見えないものの不思議さ、命と時空の流れる感覚を自分の絵のなかで表現している。

私の作品は「生命」という大きなテーマで始まり、誕生から、成長、死までの流れを人それぞれがどう感じ取るのかに興味を持っている。育った環境や文化の違いが感情または思考へどう影響を及ぼすのか。

名幸 英美

武蔵野美術大学大学院修士課程美術専攻油絵コース在学。

24



25 husen virtual

ミクストメディア

2018年

インスタレーション・可変 (30.0×40.0cmの油彩画8点、映像(iPad)、小物)

私は、美術は遠回りする行為だと思っています。作品を作ることとは、作家が見つけた関心ごとを、その作家自身の視点、フィルターを通して、何かの形に還元する行為です。途中寄り道したり、目的地までの違うルートを見つたりして、表現を突き詰めています。この作業を通して、ある物事と鑑賞者の間にはぐるっと一周回るような距離が生まれると思います。ぐるっと一周回って、その距離が縮まるかもしれないし、遠ざかるかもしれません。それが美術なのではないかと、今の私はそう考えています。

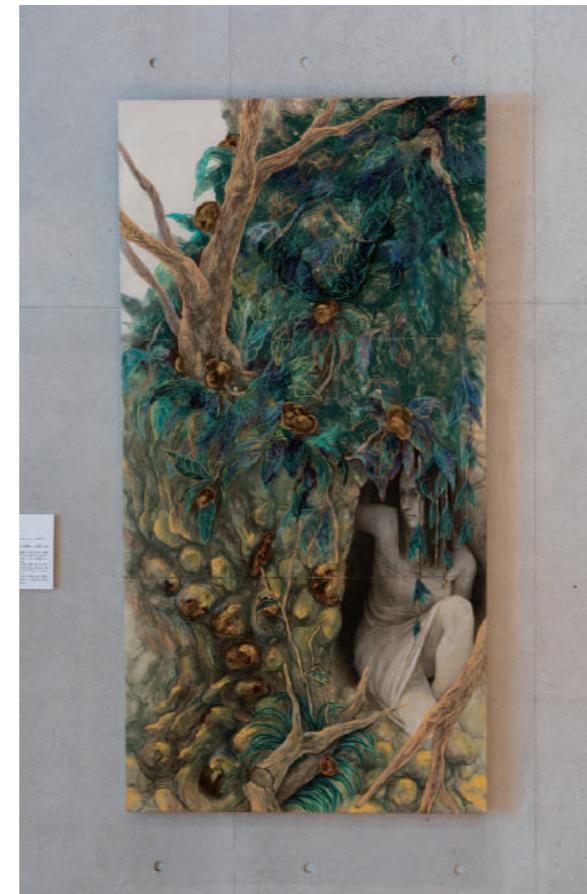
今回私が出品している作品では、絵の中の世界はヴァーチャルなのだとということを表現しています。夢の中と今この世界、どちらが現実でどちらが仮想の世界なのか分からぬ証明できないというSFの話があります。絵画も同様で、絵の中の世界が現実なのか今自分の目の前にある世界が現実なのか分からないと思います。絵に描かれている“本物”的大きさの付箋であろうものを作品の中に登場させないことで、絵の中の世界は仮想現実だということを表現しています。



キンマキ

1995年三重県生まれ。2018年武蔵野美術大学造形学部油絵専攻卒業。現在同大学院修士課程美術専攻油絵コース在学。2017年武蔵美×朝鮮大×藝大合同企画展「私とジョニーは無関係だ」(武蔵野美術大学FAL)、「人並みの豊かさ、青い犬、ヤングコーン」(小金井アートスポットシャトー2F)。2018年「フィクションアンドペースト」(Art Center Ongoing)。

25



26 Hole

ミクストメディア

2019年

116.7×91.0cm

私は幼い頃、姉のまねばかりしていくて、絵を描くことも姉のまねから始まったことです。今では、姉は絵から離れてしまいましたが、私は今でも続けています。まねから始まったことが気付けば、まねではなくっていました。

自分の気になるところから美術作品を見ることをはじめて、そこから興味が出たらもっと色々なものを見たり調べたりしてもらえると嬉しいです。

まねから始まったことが気が付けばまねではなくっていたように、ものすごく個人的なことが大きなことに広がっていくことがあります。美術にはそういう力があると私は考えています。

児玉 菜々子

1995年愛知県生まれ。2018年武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業。現在同大学院修士課程美術専攻油絵コース在学。

27 住処

日本画 (岩絵具、水干絵具、墨、銀箔・いぶし液、バステル・雲肌麻紙、細川紙)

2019年

195.6×100.0cm

私の最初の記憶は、父の似顔絵でした。3歳頃だったと思います。私は、幼い頃から絵を描いたり、何かを作ったり、字を書いたりすることが好きでした。兄弟もいなかたため、いつも1人で遊ぶことが多く、その中でも特に夢中になれたのが絵を描くことでした。そして、初めて描いた絵が父の似顔絵。顔から手足が伸びているような、とても上手とは言えない絵でしたが、父はとても褒めてくれました。今思うと、それがきっかけになったと思います。現在20歳を迎え、今までの人生を振り返ると、両親が大きくしてくれた“絵を描く”という武器で自分の一部を作り続けている、と感じます。

中里 みのり

1998年埼玉県生まれ。2017年武蔵野美術大学造形学部日本画学科入学、現在在学。2018年「ピッグウエスト学生フェスティバル美術展」(八王子東急スクエアビル)、「薺々展」(寺町美術館+ギャラリー)。2019年「つむぎ展」(Gallery Wolke)、「第2回全国日本芸術公募展」佳作。

26

27

22

23



28 あの晴れた日に

油彩・キャンバス

2019年

112.0×162.0cm

私は今美術大学に通いせっせと絵を描いていますが、実は子供の頃から絵が好きというわけではありませんでした。大学院生になって思うことは、小さい時に何か一つでも心に残る美術作品に出会っていれば今より更に楽しく制作に取り組めたのではないかなということです。今回の展示は、きっと美術館で見る展示とはまたひと味違ったさまざまなバリエーションの作品が多く飾られる展示になっていると思います。見てくださる方々の、何かのきっかけになることを願っています。この作品は、夏の暑い日に撮った写真を資料にしながら自分のイメージを加えて描いています。蒸せかえるような暑さがその写真にはでており、まずはこの暑さを表現したいと思いました。イメージから構築する色選び、タッチ、構図…全ては自分が受けたイメージを支柱にしながら作業をし、完成まで進めました。

鈴木 フィオナ知子

1992年イギリス・エдинバラ生まれ。2015年東京造形大学造形学部絵画専攻領域入学。2017年武蔵野美術大学造形学部油絵学科編入。2019年同大学卒業。現在同大学院修士課程美術専攻油絵コース在学。2017年「武蔵野美術大学企画展示大賞」特別審査員賞。2018年「アーツアンドスペース本郷ワンダーシード2018」入選、「シェル美術賞 2018」入選。



28



29 Garuda V

日本画（岩絵具・麻紙）

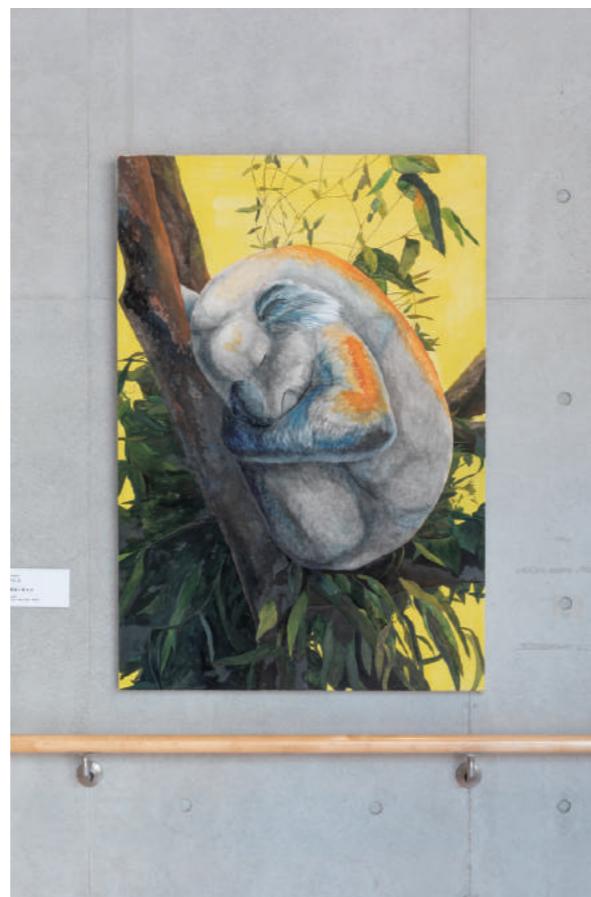
2019年

116.7×116.7cm

私の生まれ故郷は年がら年中暑い南国にあるバリ島です。緑と花と海と聖なる山に囲まれたとても鮮やかな場所です。信仰深い人たちがいつも祈りを捧げている光景は、いつも少しモヤのかかったような日本の都会で育ってきた私にとって興味深いことでした。画題にヒンドゥー教の神話に関わりのあるものをよく選ぶのもその影響からもあり、アイデンティティの表れでもあるのだと感じます。絵を描くことは私の最大の感情のはけ口であり、産みの苦しみを知る第一歩でもありました。自由のある解放された次の瞬間にお腹はいつも痛くなる、なんとも勘弁して欲しい贅沢な時間です。

齋藤 ワヤン恵衣美

1997年インドネシア・バリ島生まれ。現在武蔵野美術大学造形学部日本画学科在学。2019年有志グループ展「暁縁をゆく」（ギャラリースペースしあん）。



30 静寂に燃ゆる

日本画（水干絵具・岩絵具、雲肌麻紙）

2018年

116.0×80.0cm

八木 完

武蔵野美術大学造形学部日本画学科在学。

29

30

24

25



31 連作「運命」「転回」

日本画（水干絵具、岩絵具・雲肌麻紙）

「運命」2018年／「転回」2019年

各80.3×116.7cm

日本では輪郭線で物の形を表現するのが一般的ですが、自分の場合、絵を描く時は最初に物体の影をつけるところから始めます。影というものは万能で、そのものの形だけではなく、その場に存在する光や、どんな場所に物が置いてあるのか、角度、重さ、空気の清涼感など、様々な要素をいっぺんに描くことができます。

絵を描く際、何に重きを置くかは人によって異なりますが、私の場合は、なるべく早く自然に、描きたい物の全体像を掴むことを一番に考えて制作しています。

美大は、私とは真逆で線に命をかける人、実際に立体物を作る人、特にこだわりがない人、そのほかにも様々な表現者に出会うことができる場だと思いますので、ぜひ一度、足を踏み入れてみてはいかがでしょうか。

富田 風

1998年東京都生まれ。現在武蔵野美術大学造形学部日本画学科在学。2018年グループ展「萬々」(谷中)、グループ展「ミレニアル☆レボリューション」(原宿)、グループ展「美術と福祉プログラム展」(四谷)、グループ展「暁縁をゆく展」(上野)。2019年「第45回 国際美術大賞展」新人賞。



32 tiles

日本画

2019年

132.5×106.0cm



33 脈

日本画（岩絵具、吉祥麻紙）

2019年

116.7×80.3cm

鈴木 志歩

武蔵野美術大学造形学部日本画学科在学。

四角や丸、三角など私たちの周りにはたくさんの規則正しい図形がありふれていることにふと気付くことがあります。今回の作品はタイルのある水道を水槽に沈めることで、タイルがゆがんだ形になっている状態を描いてみました。これは屈折という現象で、水を通してタイル自体の形が変わったのではなく、見え方が変わって見えるのです。元々真四角だったそれはいびつな形に見えるようになり、以前とは違う表情をしています。単純なものなのに見え方が変わるだけで複雑になったり、今まで見えていた面と違う面を見ることができるようにになるというのはとてもおもしろく、わたしはそれを作りたいなと思っています。是非皆さんも身近な単純なものに目を向けてみてください。突然その単純の中に複雑で驚くような感動があるかもしれません。

内村 茉梨佳

1997年兵庫県生まれ。現在武蔵野美術大学大学院修士課程美術専攻日本画コース在学。



34 宿る場所

日本画（岩絵具、水干絵具、墨・雲肌麻紙）

2019年

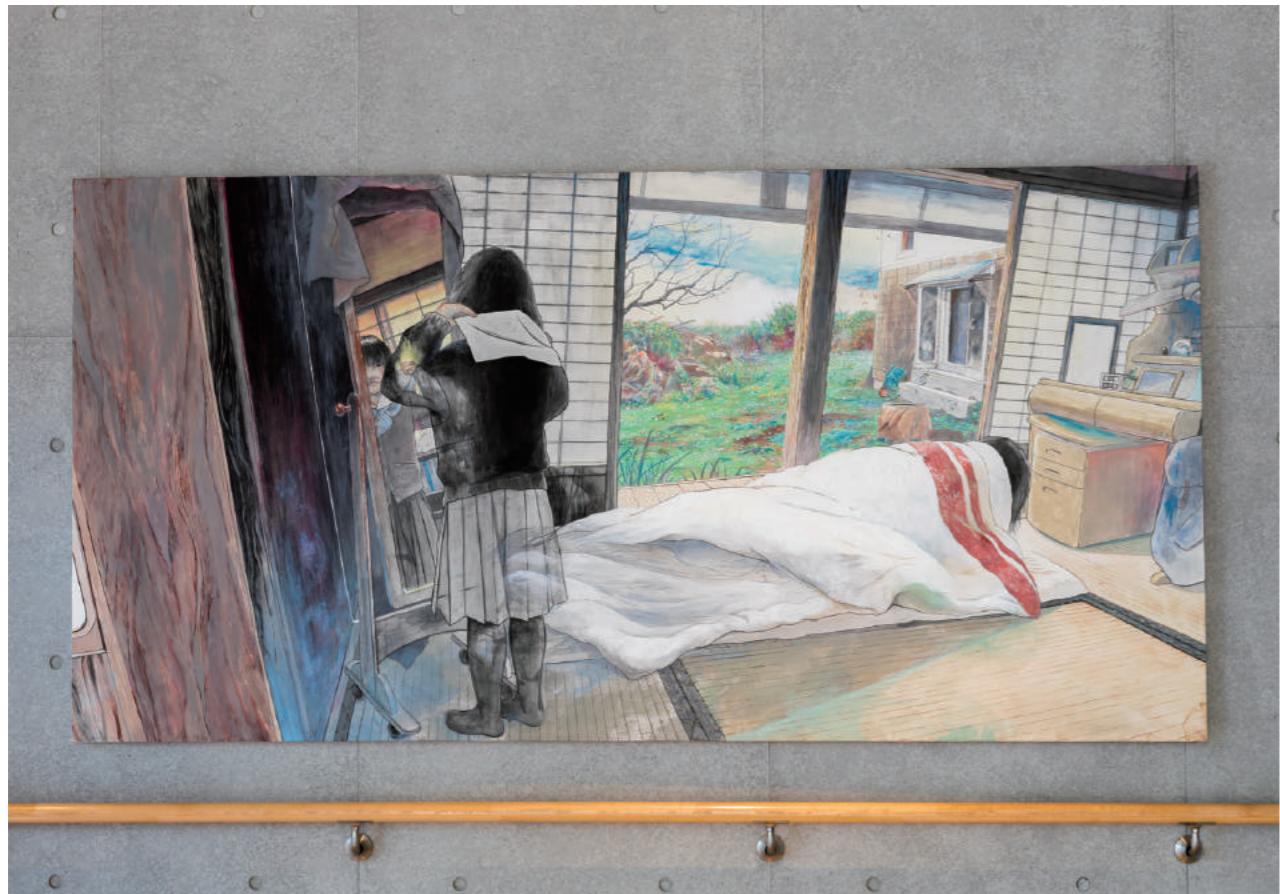
100.0×145.4cm

この作品は、奈良県桜井市の、日本最古の神社と言われる「大神神社」で見た様々な風景を組み合わせて描きました。お宮参りに七五三、合格祈願など、沢山お世話になってきた、私が大好きな神社です。この神社は本殿が無く、三輪山が御神体とされており、参拝する誰もがアニミズムの世界に誘われる、美しい場所です。その清らかで神聖な雰囲気を絵にしたいと思い、制作しました。小学生の頃、夏休みの宿題で、この神社を描いたことがあります。その時も、汗だくになりながら、とにかく一生懸命に描くけれど、上手く描けなくて、失敗して紙を何度も変えたりしてやっとの思いで完成した覚えがあります。

中川 未貴

1998年奈良県生まれ。2017年武蔵野美術大学造形学部日本画学科入学、現在在学。

34



35 日々の記憶

日本画（紙本彩色）

2016年

115.0×230.0cm

この絵は私の実家の部屋を舞台に描いた作品です。もしかしたら少し不思議な様子の絵に見えるかもしれません。時間は朝なのですが、鏡の中は夕方です。

私は日本画を学んでいますが、4年間学んだ今でも難しくて、表現法など「作品」にするのもまだまだ上達せねばなりませんし、課題は山積みです。ほとんど思うように描けなくて泣きべそかいてばかりです。ですが、それを含めて絵を描いたりすることは楽しいし、面白いし、いろいろ発見もあるような気がします。

美術に興味を持ったきっかけは、中学時代に授業で美術史をかじり感激したからでした。

日々よく見たり、自分の感じたことを流さず受けとめて、それらをよく考えていくことが大切だな、大事にしたいなと思っています。

大石 日向子

1995年宮城県生まれ、栃木県で育つ。2019年武蔵野美術大学造形学部日本画学科卒業。現在同大学院修士課程美術専攻日本画コース在学。2015年グループ展「十人十色展」。2016年グループ展 & ワークショップ「銷夏展」、グループ展「zoo展」。2017年グループ展「お日さま展」。2018年「第3回実生会展」入選、「第8回前田青邨記念大賞展」入選、個展「まよのまにまに展」。

35



36 植物

油彩・キャンバス

2017年

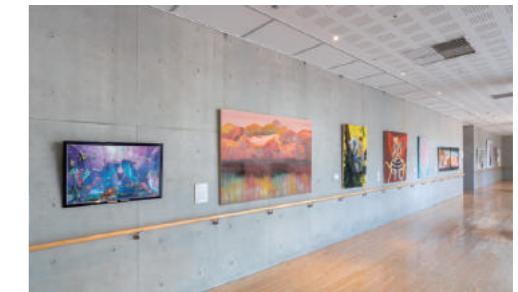
112.0×145.5cm

今回の出品作品は、自分が実際に見た風景を元に制作しています。しかしそれの写実的な再現をするのではなく、それぞれの絵画を構成している要素、例えば手前の草や奥に生えている草、真ん中の池などを、絵具の扱い方を変えたり、彩度の高い色を使ったりなどして、自分の絵画空間を構築していく、四角の中で自分の秩序を作り出していくということを意識して制作しました。

最近の作品制作においては、自分が現実世界のものの表情や形、出来事をどのように表現したら自分の実感と噛み合うか、ということを研究しています。

平子 暖

1995年生まれ。2019年武蔵野美術大学造形学部油絵学科油絵専攻卒業。現在同大学院修士課程美術専攻油絵コース在学。2019年「平成30年度武蔵野美術大学卒業制作展」優秀賞、三雲祥之助賞。「第37回上野の森美術館大賞展」入選(賞候補)。「平成30年度武蔵野美術大学造形学部卒業制作・大学院修了制作優秀作品展」(武蔵野美術大学美術館)。



36



37 今回も湘南でサーフィンをするよ。 いい波が来るのを楽しみにしている。

油彩・ジグソーパズル

2019年

50.0×70.0cm

普段の美術の授業は、とてもつまらないと思います。私は小学生の頃、「美術の授業ダメいなあ」と思っていました。それは、教科書に載っている作品は、価値が決まっている古典ばかりだからです。道徳の授業と同じで、体制側の倫理観、歴史観の押し付けでしかないからです。しかし、美術というものは現代も続いています。過去の美術作品の価値は私たち、若い世代が決めていくものです。セザンヌの絵が、くだらなかったら「くだらない」と言いましょう。ラッセンの絵が素晴らしいと思うのなら、「すばらしい」と言いましょう。それこそが過去への敬意であり、未来への可能性です。

小寺 創太

1996年東京都生まれ。2019年武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業。現在同大学院修士課程美術専攻油絵コース在学。



38 羊を数える

油彩・キャンバス

2019年

162.0×130.0cm

ねむれない夜に羊をかぞえていたことを思い出しながら描きました。体と気持ちのゆれ、日常と日常のすき間など、ここにあるのないような「あわい」をさぐりながら作品を作っています。

楠本 未来

1989年東京都生まれ。2017年武蔵野美術大学造形学部油絵学科油絵専攻卒業。現在同大学院修士課程美術専攻油絵コース在学。

37

38

30

31



39 思考は空気が薄くなった
地下で停止する

リトグラフ、木版
2019年
95.0×75.0cm

言葉に対するズレ、歴史に対するズレ、様々なズレの中から自分はどこに属せるのか。社会をうつす新聞紙を折って裏と表を曖昧にし、ズレを探りました。

版画を主に作品制作をしています。版画は紙にイメージを落とし込むまでに、版がワンクッション入るので、私は距離を置いて物事を考えて制作できる方法だなと思います。大学は、ものづくりをしている人たちに囲まれて日々を過ごすのですごく恵まれてる環境で、刺激になります。

富永 華苗

武蔵野美術大学大学院修士課程美術専攻版画コース在学。



40-1 無事故でカエル

木版モノタイプ、油絵具・紙
2014年
194.0×130.3cm

40-2 てつじん

木版モノタイプ、油絵具・紙
2016年
194.0×130.3cm

40-3 たいちょう

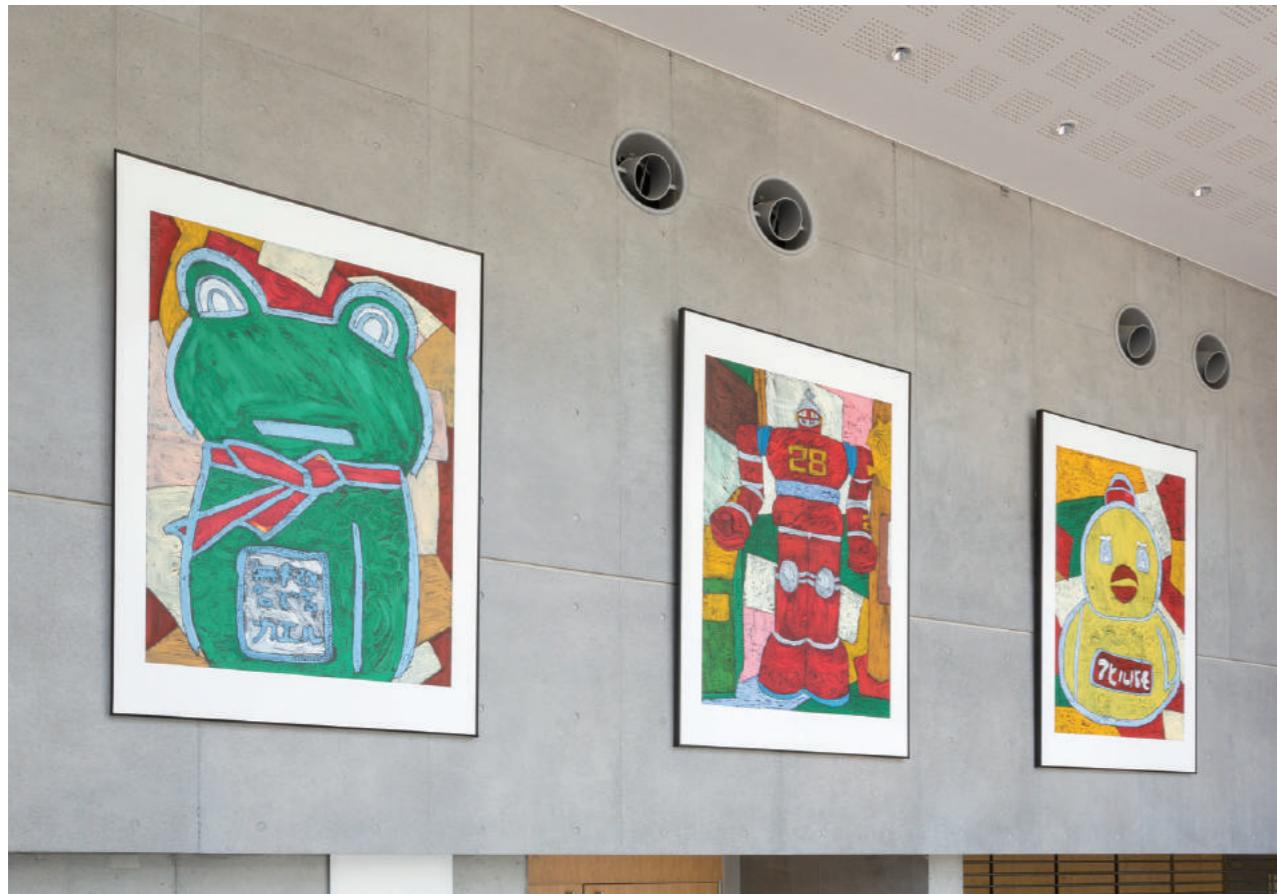
木版モノタイプ、油絵具・紙
2016年
194.0×130.3cm

40-4 あひる

木版モノタイプ、油絵具・紙
2017年
58.0×42.0cm

40-5 公衆電話

木版モノタイプ、油絵具・紙
2018年
25.0×21.0cm



40-1 40-2 40-3



40-5

「アートをもっと身近なものに」という思いを持って、版表現した作品を制作しています。

描かれる題材は生活の中で作家が目にしたモノたちです。人の背丈よりも大きく描かれたモノは、本当はもっと小さなおもちゃたち。一つはカエルの貯金箱、縁日のはずれ景品になるようなチープな存在です。

一つはロボットのおもちゃ、昭和レトロな誰でも知っているようなロボットです。

一つはあひるのおもちゃ、お風呂で浮かべて遊んだことはありますか。じっくりと見る機会がないモノたちにスポットを当てることで、絵の中では主人公。

ありふれたモノの中に潜む新鮮さや輝きを作家のフィルターを通して作品にすることで、新たな一面、個性がそこに生まれます。暮らしの中で見つけたアートシーンをお楽しみください。

北嶋 勇佑

1989年東京都生まれ。2014年武蔵野美術大学大学院修士課程美術専攻版画コース修了。現在同大学芸術文化学科研究室助手、日本版画協会準会員。2016年「第10回大野城まどかびあ版画ビエンナーレ」審査員特別賞、「日本版画協会 第84回版画JA部門奨励賞。2017年「FACE 2017 損保ジャパン日本興亜美術賞」入選。2018年個展「新世代への視点 2018. メルルーザの塩焼き」(GARELIE SOL)。2019年個展「façade ファサード」(ギャラリーフェイストゥフェイス)。

作品テーマ・コンセプト

1 川口 瑠菜

動物

2 小俣 花名

朝ご飯

実際の家での朝ご飯の風景を描きました。リビングの奥でパソコンを打っているのが母親です。向かいに座っているのは妹で朝ご飯のヨーグルトを食べています。手前の朝ご飯は姉である私のご飯です。今から座って食べようという私の目線で描いています。

3 下山 黎海

薄いカーテン

身の回りにあるようなものをモチーフとして選んで絵画を制作しています。そのものを見ながらではなくても描くことができるようなものが自分にとって重要なのではないかと考えています。そのようなものを構成して場所や状況を作っています。

画面が矩形で平面であることへの意識があります。平面に奥行きを作り出そうとすることに疑問を感じ、あまり奥行きのない絵を描いたり、触ることができるものを描いてきました。

作品について人と話すとき、人から「気配」という言葉を使って話されることが多いです。私自身は気配を描こうと思っていませんが、絵の中で人間や生物を意識的に描かないようにはしています。それらを描くと意味が出てきてしまったり、絵を見たときにまずそれらに目が行ってしまうように思うからです。人がいるようなよくある場所やものを描きながら存在は描かないため、気配のようなものが出るかもしれません。

布がチューリップ柄なのは、私の好みの問題であります。ただ制作をしていた頃、雪を描きたいと思っていたことがありました。画面全体に白い色が散らばっている状態を、雪以外のもので描こうと考え、白いチューリップ柄のカーテンになりました。

制作の方法としては、糊の引いてあるキャンバスに、自作のエマルジョン地を塗布し、テレピン、リンシードでサラサラに薄めた油絵の具で描いています。

4 田岡 智美

Clipaint

勢いよく描いた線の上から塗りつぶすように油絵の具をのせたり、グラフティらしさがあるけど厚口綿布に描いていることで絵の具の滲み方が柔らかだったりと、所々ざらして描きそれらが意外なものとなっていても組み合わせることで成立している絵になっています。

5 飯島 まり子

take a side trip

6 古屋 真美

躍っていたいだけ

ある時、窓辺に吊るしたままの洋服が、所在無くばんやりとしているよう、それがどうしようもなく不安になった。まるで自分の身体がどこかに置いてきぼりになったかのような感覚だ。その内側での出来事すべてを、確かめるように、忘れてしまわないように、たどり刷りとすることにした。

7 関 萌瑚

夜に閉じ込められた

朝起きると、自分の体が思い通りに動かない時があります。体の中の何かが寝ている間にどこかへ行ってしまって、夜に置き去りにされてるように感じます。

8 鄭 畔雲

山と紙

9 岩下 美里

踏まれた夜は枯葉の音がした

卒業制作が誤って踏まれてしまったことを思い出して作りました。

10 関田 橋

「BRn」「Dit」

今回作品の元になっているのは「翠銅鉱」と「車骨鉱」という鉱物です。翠銅鉱は色鮮やかさ、車骨鉱は形の面白さに注目しています。

11 海野 幸太郎

A LITTLE EXCELLENT

シルクスクリーンで4色印刷された写真です。新聞や出版物に使われる技術をそのまま使用しています。この写真是シリーズの中の一枚で、この一枚で何を示したいかというものではありません。少し素晴らしいという意味のタイトルのように、生活の中で目を向けないもの、社会から蓋をされているものなどを提示しています。

12 早川 佳歩

無題

銅版画でピュランという道具をつかった「エングレービング」という技法で作品を制作しています。エングレービングはお札の絵柄を制作するときに使われる技法で超絶技巧のイメージがありますが、私の場合は少ない線で一見なにを描いているかわからないものを描いています。

13 中村 朝咲

noise

この黒いかたまりの一つ一つが人であったり、あるいは星であったり、細胞であったりします。まぶたを開けて見えるもの、まぶたを閉じて見えるもの、どちらも等しくそこに存在するものです。

14 大塚 美穂

untitled

コウモリをイメージしました。



15 鈴木 英里子

ワンダーバード

長い睫毛を瞬かせ、キラキラとした大きな瞳で彼女は私を見つめる。その視線にドキリとしつつも目を逸らすことはできずに私もまたその瞳を見つめ返す。

彼女が何を思い、何を語りかけてきているのかは正直解らない。しかし、そこには私達だけの時間が確かに存在していた。

私は今、上野動物園のヘビクイワシをモデルに木版画の制作を続けている。

彼女をモデルに制作を続けている理由は、私が感じ取った彼女の魅力を作品に刻みこみ、残したいと考えたからだ。

美しい鳥と表されるヘビクイワシであるが、それはあくまで種全体のイメージである。

無論彼女も美しいが、それは多々ある魅力のうちの一面にすぎない。その中から一例を挙げるとすれば、彼女はカメラを向けると駆け寄ってきて「さあ、私を撮って」とと言わんばかりにポーズを決める。その様を愛らしいと表現する以外にいかに表現できようか。

彼女の魅力を、個性を、作品として表したい。そして私の作品を通して少しでも彼女の魅力を感じて貰えたのならば作者としてそれ以上の喜びはないと思う。

16 古賀 慧道

木洩れ日の

銅版から湧き出る緑青を眺めていると、自分とは違うところで流れている時間を意識させられます。紙に刷り取られ、変化を停められた緑青も、人には知覚できない速度で変化し続けているのかもしれません。

17 周昊

豆苗

1.5L のプラスチック瓶



18 TAO QIANQIAN

A.M.I.T.W1

19 木内 あかり

野

社会には様々な人がいて、毎日を過ごす中で、そのそれぞれが考え、感じ、話しています。そうして人同士は、時に反発しあったり、和解したりして、大なり小なりの社会ができています。

本作品では、野に群生する草花を人のように感じながら描きました。草花が重なり合い、絡み合う様子を、人が生きていく社会のように捉えています。

20 沢 美紅

52Hz

<箔を使った技法>
洋金箔・銅箔
いぶし液：茶色っぽい色にくすむ
腐食液：緑っぽい青色になる

<モチーフ>
○52Hz のクジラ
他のクジラの周波数と違う
姿は誰も見たことがない
鳴き声だけは聞かれている
コミュニケーションは取れているのか?
→厳しいのでは?

絵を描くこと(わたし)
鳴くこと(52Hz のクジラ)
どちらもだれかに向かってしていること。(→理解されたい。)
*鳴くだけ、描くだけでは一方向でしかないとも言えるし、しない
ことには可能性もない。
→いつか報われて、花咲きますように。

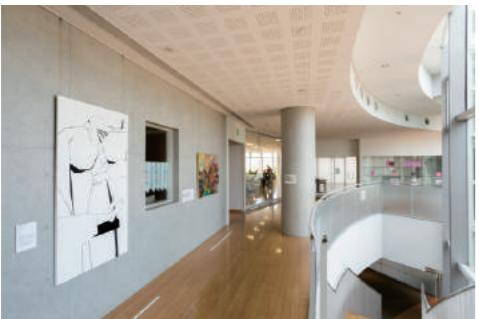
涙壺
古代ローマでは、出兵する奥さんが旦那さんを思って涙を入れた壺
→その壺にクジラの涙が入っている
その涙から花が咲く

21 向井 楓

Soda

この絵は海岸沿いにある、人工的に掘られた石窟の前に溜まっている腐った水溜りを上から見た風景画です。しかし、私にとって風景画と言うのは風景の一部を切り取ることだから私は作中で一部を箱型に切り取っています。それが中央に描かれています。

しかし、sodaと、書かれている事により、どこにsodaあるか考えてしまう。それを探す事をコンセプトにしているので、意味深な言葉をメッセージに残しています。



22 深田 桃子

葬儀

作品を制作する上でイメージしたのは葬儀のようなものです。
横たわる人の横には二人の人物が立って居ます。
左の人物は右の人物に寄りかかって悲しげな雰囲気を醸し出して居ます。
一方寄りかかっている人物はまっすぐと立って平然としているかのようです。

側から見ると冷たい人のようにも見えます。
ここで表現したかったのは悲しいポーズを取れない人のジレンマです。
寄りかかれている人物は誰かに寄りかかりたいほど悲しいけど支える立場になってしまったから悲しいポーズをとれません。
そんなことを無視して二人して悲しさに耽っていたら葬儀は崩壊します。
だから寄りかかれている人物は平気な風に立っています。
そういう立場に立たされる瞬間が一生の中には何回かあります。
その時にこの人物の切なさをより一層感じいただければと思います。

23 松河 直美

心づもり

この作品は、私が海へ行った時に出会った風景と大気を描いたものです。なぜこの絵が白いかというと、私の見た海は朝が来たばかりで白く優しく光っていたからです。また、この絵では白い絵の具を5種類使っていてそれらを使い分けることで空気の微妙な変化を表現しています。この絵を見た人が暖かくて優しい光を感じてくれたらとても嬉しいです。

24 名幸 英美

めぐり

25 キンマキ

husen virtual

付箋の大きさが、貼り付ける対象によって絵の中で変化することが面白いと思いました。また“本物”の大きさの付箋を作品の中に登場させないことで、絵の中の世界は仮想現実だということを表現しています。夢の中と今目の前に広がっているこの世界、どちらが現実でどちらが仮想の世界なのか分からぬし証明できないというSFの話があります。絵画も同様で、絵の中の世界が現実なのか今自分が見ている世界が現実なのか、分からぬということを、この作品では表現しています。

26 尾玉 菜々子

Hole

27 中里 みのり

住処

石、岩、木、葉。全てが連なったものから生み出されるその形態からは、まるで肅然たる動物がゆっくりと呼吸をしているかのような気迫と生命を感じた。それは、野心の住処となって人々の心の中に漂っている。

28 鈴木 フィオナ知子

あの晴れた日に

この作品は、夏の暑い日に撮った写真を資料にしながら自分のイメージを加えて描いています。蒸せかえるような暑さがその写真にはでており、まずはこの暑さを表現したいと思いました。イメージから構築する色選び、タッチ、構図…全ては自分が受けたイメージを支柱にしながら作業をし、完成まで進めました。

29 斎藤 ワヤン恵衣美

Garuda V

自分の故郷に関する描くことで、その場所にいた記憶や思い出を忘れないようにするために描いています。この作品を入れてGarudaは5作描いていますがいずれも赤色使うようにしています。鮮やかな原色はバリ島を私の中に呼び起しますし、私の中の半分の血はそこからきているんだという自分の根元と日本にいながらも繋がっていたい願望でもあると思います。

30 八木 完

静寂に燃ゆる

31 富田 凪

連作「運命」「転回」

貴方は手作りの箱舟に乗り、世界という名の大海上を旅します。食料がぎゅうぎゅうに詰まった麻袋と、決して光を失うことのないランタンが貴方の旅の仲間です。貴方はどこへでも行くことができます。『決して過去を振り返ってはならない』ただ1つ、この約束を守りさえすれば。

貴方の箱舟は、来た道にその足跡を残しながら進みます。決して、振り返ってはいけません。過去はいつも貴方を見つめています。誰からも愛されなくなった、忘れ去られた過去は、貴方のことを一等恋しく思っているのです。振り返ってもらえるその日を、過去は信じて待っています。

もし約束に背いて振り返れば、貴方はたちまち過去に全身を絞られ、ここではないどこかへ引きずり込まれることでしょう。箱舟は粉々に碎かれ、ランタンの光は眠りにつき、二度と目覚めることはありません。貴方の未来は、永遠に失われます。

過去を振り返ることはできないけれど、未来を自由に選び取ることができる世界。

そんな世界を描きました。

32 内村 茉梨佳

tiles

33 鈴木 志歩

脈

34 中川 未貴

宿る場所

奈良県桜井市にある、大神神社の様々な景色を組み合わせて描きました。画面の左右に、舞っている巫女の手、右側下方には茅の輪ぐり、右上に鳥居を配置しました。この神社に参拝する際に自分自身が感じる雰囲気を、色や形にして表現してみたいと思い、制作しました。

35 大石 日向子

日々の記憶

この絵は私の実家の部屋を舞台に描いた作品です。私の実家は100年以上も昔に建てられた古い家で、大正時代から建っています。絵の中には2人の女性が描かれていますが、両方私の妹で、同一人物です。布団の奥、縁側から見える風景は朝で、鏡に映っている部屋の時間は夕方です。これは絵巻の手法でよく見られる「異時同図法」を参考に表現しました。構図も少し上から見ているような状態で、空間も少し歪んでいます。これも絵巻の俯瞰構図を倣っています。私の中では、絵は残せるもの、そして時として言葉以上に人に伝えられるものだという観念が強いので、タイトルの「日々の記憶」という名の通り、日常のなんてことない、思い出として語られることがあるかもわからないくらいなんてことのないひと時を描き残したいと思って作品にしました。

36 平子 暖

植物

からふるでいいでしょ。

37 小寺 創太

今回も湘南でサーフィンをするよ。
いい波が来るのを楽しみにしている。

郊外と田舎、半端な浮遊した土地性、でヌクヌクと育った羽村市や青梅市の若者たち。その土地に根付いているアートとは一体何であろう。それはピカソでもゴッホでもデュシャンでもなく、村上隆でも奈良美智でもなく、ラッセンである。この悪い場所、フィルターバブル状であり閉じられたユートピア（ディストピア）の表れ、私たちはラッセン的表象の中を生きている。「ポストラッセン世代」である。ラッセンへと想いを馳せること。美術家として日本・現代・美術の申し子であるラッセンと向き合うこと。ラッセンを日本受容における、その土地性と連関的に分析すること。それにより、浮かび上がってくる「美術」という制度の問題点に対しての批評意識。それが、この息苦しい、一過性で上演的なグローバル資本主義体制下の「コンテンポラリー・アート」を打破するための、隘路となるのではないか。

38 楠本 未来

羊を数える

心と体のずれや日常と日常のすき間など、ここにあるのにはないような「あわい」をさぐりながら、絵画、インスタレーション等媒体を限定せず、制作をしています。
本作はねむれない夜に羊をかぞえたことをきっかけに制作をはじめました。ねむれないときは、足の付け根がムズムズしだしたり、背中がだるくなったり、嫌なことを思い出して止まらなくなったりと、心も体も不自由な状態にあります。黙々と羊をかぞえることは、あわいを作り出し、心と体からはみ出したわたしを逃す術だと思います。羊をかぞえるように、キャンバスに何度も十字を描き重ねることで、視覚的にもあわいを表現できればと考えています。

39 富永 華苗

思考は空気が薄くなった地下で停止する

40 北嶋 勇佑

あひる
無事故でカエル
てつじん
たいちよう
公衆電話

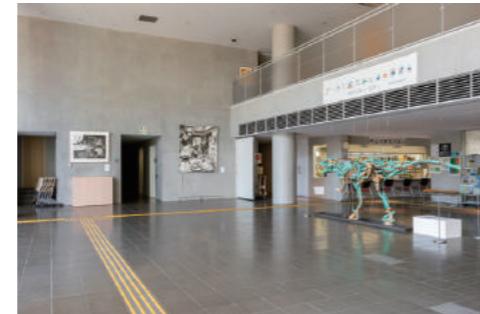
世の中にはものづくりがしたいという気持ちから始まった制作活動は、現在の技法を続け11年が経ちました。

木版画とモノタイプ（1点刷り版画）の技法をミックスした独自の手法を用いて、何気ない日常や、日用品、旅先の風景など、暮らしの中で見つけた1コマ1コマを描いています。モチーフのポップさと油絵具の力強さを併せ持つ画風は、絵画的であり、版画では類を見ない技法と自負しています。

作品本来のもつ魅力は画像ではなかなか伝わりません。

美術であるからには本物（実物）だからこそ伝わる、伝えられる事を探求しながら制作を続けています。近くで見る、遠くから見る、斜めから見るなど様々な角度から鑑賞してみてください。きっと発見があるはずです。

私自身はものづくり全般に興味があり、展示設営、工作（主に木材）、什器製作を得意としています。最近では教育色の強い展示や、ワークショップにも興味を持ちながら、幅広い視野で自分の作品（または自分自身）を見つめながら日々を過ごしています。



○ プログラムの記録 (2)

鑑賞プログラム

赤ちゃんと学ぼう——赤ちゃんアート塾 小中学生のためのギャラリー・トーク

造形ワークショップ

開園！はむらアート恐竜ランド



赤ちゃんと学ぼう — 赤ちゃんアート塾



日時： 7月27日（土）第1回 11:00～12:00 第2回 13:30～14:30

対象： 月齢3ヶ月から12ヶ月の乳児とその保護者（事前申込） 定員各回5組

講師： 杉浦幸子（塾長、武蔵野美術大学造形学部芸術文化学科教授）

米徳信一（記録、武蔵野美術大学造形学部芸術文化学科教授）

参加者： 第1回 4組（5ヶ月1名、7ヶ月1名、8ヶ月1名、11ヶ月2名）

第2回 4組（4ヶ月1名、10ヶ月1名、11ヶ月2名）

スタッフ： 教員1名・学生4名（芸術文化学科）、羽村市職員1名

全国各地の美術館等で行われてきた鑑賞ワークショップ・プログラム「赤ちゃんとびじゅつかん」が、羽村市で初めて開催されました。展覧会の作品を赤ちゃんと一緒に楽しみ、同時にアートを楽しむ赤ちゃんの反応や様子から、大人が学ぶことや発見もたくさんありました。作品だけではなく、地下・1階・2階・3階と空間が変化するゆとりの建物も赤ちゃんに大きな刺激を与えたようです。

アンケートから参加者の声

- ・絵以外の空間にも反応していた。
- ・どの作品にも指差しや声を出して反応していた。
- ・触りたがったり、拍手をしたり興味津々でした。
- ・一緒にナビゲートしてもらいながら見られたのがよかったです。
- ・親も赤ちゃんも楽しめました。赤ちゃんがとても触りたがっていたので、触ってもよいアート作品があるといいなと思いました。
- ・赤ちゃんを連れて芸術鑑賞できる機会は少ないのでとてもよかったです。



小中学生のためのギャラリー・トーク



日時： 7月28日（日）13:30～14:30

対象： 小中学生（未就学児・高校生・一般参加可能、事前申込不要）

講師： 辻美紅・向井楓（武蔵野美術大学造形学部日本画学科3年）、春原史寛

講師補助： 大西瑠夏・宮内美咲子（武蔵野美術大学造形学部芸術文化学科2年）

参加者： 7名

スタッフ： 学生6名（芸術文化学科）、羽村市職員1名

子どもたちやご家族、地域の方と一緒に展示企画者が会場を回り、対話しながら作品の魅力を楽しんだり、新しい見方を見つけるトークです。出品作家の有志2名も自作に関するトークで参加し、子どもたちが作者も気づいていなかった表現に気づいたり、作者が考える以上の深い制作意図が伝わっていました。アーティストにとっても大きな驚きがありました。

アンケートから参加者の声

- ・ふだんは美術館などで静かに見ること、考えることしかできないけれど、今回は実際に作者にきてもらって、自分で考え、想像することもでき、それでおしまいではなく、最後に本当はどうなのかを聞けて、自由に鑑賞できて貴重な体験だった。（小学5年生）
- ・子どもたちの声が聞ける美術館は今までなかったので楽しく参加できました。明るく開放的な展示室で、太陽の光を受けた作品が美しくて良かったです。楽しい時間をありがとうございました。（40歳代女性）



開園！はむらアート恐竜ランド

ワークショップ①

自分だけのかっこいい・かわいいオリジナルのミニ恐竜をつくろう！

日時： 8月3日（土）

第1回 9:10～10:10 第2回 10:30～11:30

第3回 13:00～14:00 第4回 14:30～15:30

対象： 小中学生（小学3年生までは保護者同伴、事前申込） 定員各回25名

会場： ゆとろぎ地階小ホール

講師： 辻蔵人（造形作家、武蔵野美術大学大学院修士課程彫刻コース修了）

配布物： つくり方シート（A3片面）

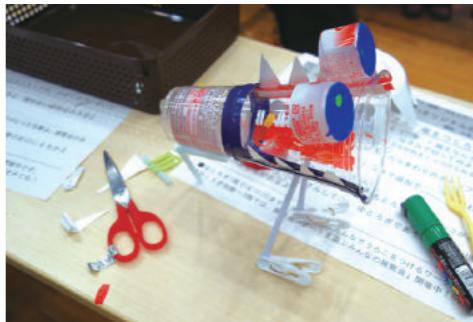
参加者： 第1回 小学生23名（1年5名、2年8名、3年3名、4年5名）、保護者・未就学児18名

第2回 小学生22名（1年8名、2年4名、3年4名、4年8名、5年1名）、保護者・未就学児22名

第3回 小学生23名（1年5名、2年7名、3年4名、4年5名、5年2名）、保護者・未就学児23名

第4回 小学生23名（1年8名、2年4名、3年2名、4年6名、5年3名）、保護者・未就学児24名

スタッフ： 学生5名（芸術文化学科）、羽村市職員1名、瑞穂町職員1名（午前）、青梅市職員1名（午後）



ワークショップ②

みんなでハムラ・レックスをつくろう！

日時： 8月3日（土）9:00～16:00（時間内随時参加受付）

対象： どなたでも（事前申込不要）

会場： ゆとろぎ1階大ホールホワイエ

立体恐竜制作：辻蔵人

協力： 多摩イシバシ株式会社

参加者： 延べ164名

スタッフ： 教員1名・学生1名（芸術文化学科）

造形ワークショップは、鉄を使用した恐竜や動物をモチーフにした大型作品で知られ、羽村市の保育園内に作品を設置するプロジェクトにも参加している造形作家・辻蔵人さんに講師と発案を依頼し、春原と計画を作成しました。玉川上水や水辺の自然などの羽村市や西多摩の環境をリサーチしていくうちに、資源リサイクル企業が多いことが分かりました。

そこで、リサイクルを大きなテーマとし、夏休みの子どもたちが興味を持てそうな恐竜を組み合わせ、家庭で出るようなプラスチック容器を中心にした廃材を用いたオリジナルの小型恐竜を作り、環境問題にも目を配れるようなプログラム①、そして、辻さんが木材を使用した大型の恐竜の骨組みを制作し、そこに羽村市の企業に依頼して無償で提供を受けた廃材を使用したうろこを貼り付け、参加者のメッセージも書き込むプログラム②を実施しました。

①では、辻さんや学生スタッフのアドバイスを受けながら、子どもたちは材料広場から好きな素材を選んで組み合わせて、廃材を恐竜のパーツに見立てる自由な想像力で思い思いの恐竜を作り、完成した恐竜を会場の一角に設置されたジオラマで遊び、記念写真を撮影していました。

②では、アーティストの恐竜の骨組み作品に、参加者が段ボールとウレタン素材の端切れに自分の願いやメッセージ、イラストなどを記入して、うろことして貼り付けていって全身を覆い、みんなで1つの恐竜を完成させました。このハムラ・レックスは展覧会会期中、ゆとろぎ1階の中心に展示され、今回のプロジェクトのシンボルとなっていました。

2つのワークショップを通じて、表現を行いながら生きるアーティストの姿や創造力に、子どもたちが直に触れることを目指しました。

アンケートから参加者の声

- ・好きな材料を使って自分の好きなきょうりゅうをつくれる所がいいと思った。
- ・材料がいっぱいあったのでうれしかった。
- ・いらぬものからすごいものがたくさんできた。
- ・大人からの指示ではなく子どもに考えさせて何でもいいから作る力を、学校とは違う思考でよかったです。
- ・広いスペースでゆったりできてよかったです。学校ではいつも時間が足りないようです。
- ・身近な材料で頭を使って作るのがよかったです。
- ・物のリサイクルという観点で有意義と感じた。
- ・自分でどんどん工夫している姿が見られてよかったです。はじめに見本がなかったのがよかったです。
- ・親子で協力して作ることで普段はできない体験ができた。

○ 準備・運営ドキュメント

2019年

1月

- 1月上旬：羽村市から武蔵野美術大学（社会連携チーム）に
夏休み期間の子ども向け企画（展覧会およびワークショップ）での連携について打診
1月18日：芸術文化学科研究室における社会連携チームとのミーティング（企画担当教員・予算について）
1月22日：羽村市生涯学習センターゆとろぎにおけるミーティング（企画実施の可能性についての検討）
および館内調査と展示計画作成のための記録写真撮影

2月

- 2月19日：ゆとろぎにおけるミーティング（企画内容の検討）
および展示計画作成のためのゆとろぎ館内各所の計測調査、
ピクチャーレールおよび照明位置の確認
2月20日：学内ミーティング（企画書の作成について／造形ワークショップ依頼アーティスト決定）
展示・関連企画企画書完成

3月

- 3月7日：油絵学科・油絵専攻研究室、油絵学科・版画専攻研究室、日本画学科研究室への協力依頼
3月15日：展示計画作成のためのゆとろぎ館内各所の追加調査
3月19日：学内ミーティング（学生への作品出品依頼方針・方法について）
3月29日：学内ミーティング（アーティストとの造形ワークショップ内容検討）

4月

- 4月11日：ゆとろぎにおけるミーティング（人事異動による羽村市担当者変更／企画概要の説明・検討）
4月18日：学内ミーティング（造形ワークショップの概要決定）
4月25日：学内ミーティング（出品学生への対応について／学生ボランティアについて）

5月

- 5月6日：出品学生向け説明会（版画専攻）
5月9日：出品学生向け説明会（油絵専攻）
5月10日：出品学生向け説明会（日本画学科）
5月中旬：「子ども体験塾」全体チラシ完成、青梅市・羽村市・瑞穂市の全小中学生に配布
5月24日：学内における学生ボランティア募集説明会
5月29日：出品学生からの出品作品情報・展示環境希望提出締め切り、出品作品リストの作成
5月31日：羽村市リサイクルセンター見学・取材（造形ワークショップ企画作成のための取材）

6月

- 6月1日：『広報おうめ』『広報はむら』『広報みずほ』6月1日号に展覧会および関連イベントの情報掲載
6月6日：芸術文化学科春原ゼミにおいて造形ワークショップの試行・試作
6月7日：学内ミーティング（チラシ制作について）
6月下旬：展覧会チラシ完成、青梅市・羽村市・瑞穂市の全小中学生に配布
6月28日：造形ワークショップ「開園！はむらアート恐竜ランド」参加者募集締め切り

7月

- 7月7日：ゆとろぎで開催された展覧会「アート in はむら」展示・ギャラリートークの調査
7月9日：学内ミーティング（広報について）／プレスリリースの配信
7月12日：ゆとろぎでの造形ワークショップ会場調査・作品搬入のための経路確認・展示器具数の確認
乳児のための鑑賞ワークショップ「赤ちゃんと遊ぼう—赤ちゃんアート塾」参加者募集締め切り
7月中旬：キャブション・パネル・看板・バナー・サイン類の制作
7月16日・17日：学内における作品集荷作業
7月19日：学内ミーティング（展示作業の進行について）
7月下旬：造形ワークショップ協力企業（材料となる廃材提供）の調査・依頼
7月22日：ゆとろぎへの作品搬入・展示作業
7月23日：展覧会「アートを遊ぶみんなの展覧会」オープン
7月25日：乳児のための鑑賞ワークショップ実施のための会場リサーチ
7月27日：乳児のための鑑賞ワークショップ「赤ちゃんと遊ぼう—赤ちゃんアート塾」実施
7月28日：造形ワークショップに使用する恐竜「ハムラ・レックス」のゆとろぎエントランスへの設置作業
「小中学生のためのギャラリートーク」の実施

8月

- 8月2日：造形ワークショップ会場準備作業
8月3日：造形ワークショップ「開園！はむらアート恐竜ランド」実施
8月2日～12日：子ども体験塾「アートであそぶ夏休み！」開催期間
8月2日：展覧会場での子どものための鑑賞ワークブック配布開始
8月25日：展覧会閉会／展示作品撮影
8月26日：展覧会撤収作業・作品搬出



9月

- 9月13日・17日：学内における作品返却作業
9月17日：学内ミーティング（造形ワークショップのふりかえり）

2020年

2月

記録冊子の編集

3月

記録冊子の発行



○ 広報・配布物とキャプション・パネル

チラシ・ポスター



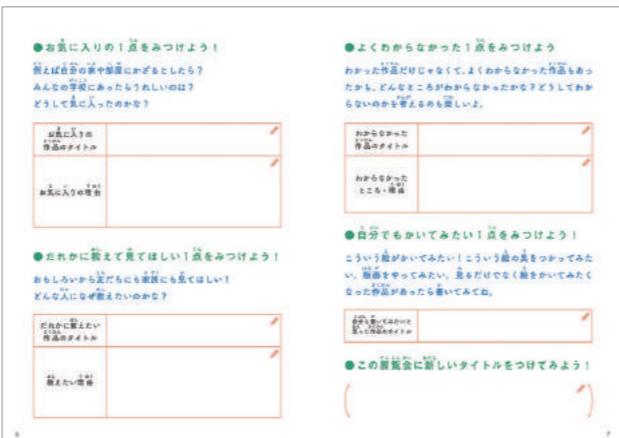
キャプション・パネル



夏休みに実施される特別な展覧会として、子どもたちが親しみやすく楽しいイベントをイメージ。

チラシは青梅市・羽村市・瑞穂町の全小中学生へ配布されたほか、各市町の施設などに配布・掲示されました。

ガイドブック『みんなのための遊び方ガイドブック』



アートと子どもたちをつなぐ展覧会のための特別なガイドブック（A5・11頁）。

展示会や作品の様々な見方を提案したほか、ゆとりぎの建物についても紹介。来場者に向けて無料で配布されました。

論考

プロジェクトをふりかえって — その成果と課題

春原 史寛（武藏野美術大学造形学部芸術文化学科准教授）

坂本 実咲（子ども体験塾実行委員会事務局）

计 藏人（造形作家）

杉浦 素子（武蔵野美術大学造形学部芸術文化学科教授）

鈴木 齊 (羽村市掌習コ=ティキ=タニ)

飯盛 鋼士（武藏野美術大学造形学部美術文化学科卒業）

莱因·盖瑞（或称“盖瑞·莱因”，当代最有影响力的视觉艺术家之一）

片山 天羽（武藏野美術大学造形学部芸術文化学科学生）
上西 瑞雨（武蔵野美術大学造形学部芸術文化学科学生）

人四 墓室（武藏野美術大学造形学科古文化系科主任）

侯木蘭(武藏野美術大学大学院修士課程造形研究科美術専攻)

守本 格 (武蔵野美術大学造形学部芸術文化学科学生)

北嶋 勇佑（武藏野美術大学造形学部芸術文化学科研究室助手）

板橋 孝浩 (武蔵野美術大学大学企画グループ社会連携チーム)



学生たちの作品を誰かの日常に置いて子どもたちの生活にアートを持ち込む ——生涯学習センターを舞台としたアート・プロジェクトの意義

春原 史寛

武蔵野美術大学造形学部芸術文化学科准教授

武蔵野美術大学が協力した羽村市・青梅市・瑞穂町による今回の「子ども体験塾」は、地域の教育・文化の向上を図るため、夏休みの時期に合わせて「アート」をテーマに小中学生を対象とした展覧会、ワークショップを実施し、体験してもらうことで、子どもたちのアートへの興味を促すとともに、知的好奇心を喚起し、将来への夢や希望を育む機会を提供という目的で実施された。昨年度までの体験塾では「サイエンス」が主なテーマとなっていたが、本年度は新たに「アート」をテーマとすることとなり、武蔵野美術大学が社会連携事業として協力し、展覧会とワークショップを企画・実施することとなった。

美術大学が行う企画としての独自性を考え、展覧会では、「アート」への入口として、子どもたちが日常、図工・美術の授業において親しんでいる「学校」と、共通点のある美術を専門とする美術大学に注目し、武蔵野美術大学学生の多様な作品を展示し、子どもに向かって展示形式とワークシートの工夫を通じて、わかりやすく伝えて鑑賞することで、自分たちの学校・家庭・そして地域での生活を豊かにしてくれる可能性を持つことを実感してもらうことを目指した。一方で、本学の学生の学修と研究の成果提示の場としての活用も目指した。自己の作品が、美術を専門とする美術館ではない社会の場ではどのように捉えられるのか、学生たちにとっても貴重なフィードバックの場になるとを考えた。さらに企画実施の補助を担当する学生にとっても、社会の中でアートがどのような位置にあるのかを実践的かつ実感的に感じ取る機会となる。

さて、今回の体験塾が「アートであそぶ夏休み！」をタイトルとしていることもあるが、さらに校外学習における美術館訪問でたびたび持ち出されるイメージである「美術を勉強する」ことではなく、参加するすべての子どもたちがアートで意図的かつ積極的に「遊ぶ」ことを意図し、さらにその子どもたちの日常の中での発見を伴う姿が、大人や地域市民にも波及することを期待して、展覧会のタイトルは「アートを遊ぶみんなの展覧会」と設定した。

会場となる羽村市生涯学習センターゆとろぎは、JR羽村駅から徒歩約10分の好立地で、道路を挟んで図書館もあり、学校帰りの放課後や休日に、友人と遊びしゃべる「遊び場」であり、宿題や勉強をする「居場所」で、異年齢の人々が交差する「交流の場」もある。それは生活と地続きにある「日常」の場である。したがって、良かれ悪しかれ「非

日常」の場として捉えられがちな美術館や作品展示の現場とは異なる展覧会となったことが、今回の展示の一番の特徴である。外光の入る場所も多く、夜間や天候の変化で展示の様子が様変わりする。美術作品の展示に特化した空間である美術館ではない、様々な用途のための性格の異なる多数の空間を有する生涯学習センターでの展示であり、美術館のホワイトキューブではない、多種の空間との協働で作品を見せることが出来る。しかし一方で、展示が日常空間に埋没しがちになる。

さて、出品作家は本学の日本画、油絵、版画を学ぶ学生のうち、主に専門課程以降で卒業・修了研究に取り組む前の比較的余裕のある学部3年生・大学院1年生を中心に、各学科・専攻の研究室に推薦を依頼して決定した(学部4年生・大学院2年生の推薦も多数であった)。平面作品の作家(学科・専攻)を対象としたのは、初めて本格的に使用する会場での、搬入・展示作業や安全管理の便を考慮したことであった。

出品学生に出品作品を決定してもらうこととして、小中学生に向けたアートを体感してもらう展示が一番の目的で、それ以外の具体的なテーマは設定せず、学生から提示された多様な作品が集まった時点で、ディスプレイやワークシート、鑑賞プログラムなどで見せ方・伝え方を工夫することを伝えた。新作・既存作を問わず、原則1名1点の出品、サイズは50から100号程度が目安、1階大ホール入り口上の大型壁面は、位置が壁面上方(床面から2200mmの位置から5800mmまで)のため、見上げて鑑賞することとなり描写が細かい作品は向きではあるものの、大型作品の展示が可能。さらに公共施設の入場者が限定されないフリースペースでの展示であるため、性的な表現・暴力表現(許容限度以上のもの)、差別的表現および過度に偏った政治的・宗教的な表現、誤って触れたり、展示物が転倒・落下した際に鑑賞者にけが等の恐れがある危険性のあるもの(臭気を発したり周辺を汚損する可能性のあるものを含む)は、展示できない可能性があることをあらかじめ説明した。さらに、フリースペースで子ども向けの展示という性格上、また、常時の監視が不可能のため(開館・閉館時のチェックのみ)、損害保険を掛けるものの作品破損・汚損の可能性がゼロではないことを伝え、可能な限り額装することを推奨した。

実際の展示では、作者が子どもに見て欲しい作品、伝えたいテーマを有する作品が集まる傾向となった。作者には、

子どもたちへのメッセージ文の提供を依頼し、作品のそばにキャプションに合わせて提示したが、作品とメッセージ共にいわゆる平易でわかりやすい「子ども向け」になります。それぞれのアーティストとしての表現に向き合う言葉を直に伝える結果となった。表現内容が伝わりやすい具象表現による作品のほか、抽象表現による作品、コンセプチュアルな作品も多数含まれる多様な作品を提示できたのは、子ども向けに特化しすぎたテーマを設定しなかったからだと思われる。

子どもたちの鑑賞をさらに促すために、小冊子『遊び方ガイドブック』を制作、無料配布した。場所ごと空間ごとに様々な表情を持つ、日常の使用では意識されない建築物としての「ゆとろぎ」の面白さを伝えるために、各所のディィテールの写真を掲載し、それを探しながら館内をめぐってもらい、その途上で作品と出会い、日常の空間が作品によって変化し、また作品の見え方も空間によって規定されることを伝えようとした。

なお、展覧会の設営・撤収や、鑑賞プログラムの補助は、博物館学やマネジメントなど、アートと社会をつなぐ理論と実践を学ぶ芸術文化学科と、大学院修士課程芸術文化政策コースの学生が、ボランティア・スタッフとして担当した。特にこのような作業やプログラムに初めてかかわるような学部の1・2年生が多く、学内で学ぶ展示や鑑賞の理論を社会のなかで実践して確認する貴重な機会となった。ホワイトキューブではない多様な空間に対応した展示という点も、彼らの関心を引くこととなった。

造形ワークショップは、恐竜をテーマとした2つのプログラムを実施した。講師と企画提供を造形作家である辻藏人氏に依頼し、アーティストの想像力や、素材や技法やテーマへのこだわりに直に触れてもらうことを目指した。辻氏は鉄を用いた作品に取り組み続けており、同じ材質に属する素材であっても、その細やかな違いを見分ける眼と適切な技法を選んでその素材に向き合う姿勢を持っており、そのようなアーティストの在り方に子どもたちが触れることで、日常のものの見え方が変化することを期待した。実際に子どもたちは、生活中から生まれる廃材を材料とした今回のプログラムから、見慣れた材料でもその組み合わせや工夫によって、自分の考える面白いものを生み出せるプロセスを楽しんだようである。

ところでこの造形ワークショップの開催日である8月3日には、ゆとろぎの大ホールでライブ・コンサート「LIFriends FINAL ワンマンツアー共に歩む道—FINAL ゆとろぎ大ホール」が開催された。LIFriends(リフレンズ)は、東京都立羽村高校の軽音楽部で出会った同級生5人組が結成し、2006年に活動を開始したロック・バンドである。2013年のメジャーデビュー後も羽村発のバンドであることを常に前面に押し出して活動していたが、2019年2月に解散を発表、その最後のライブがこの日であった。この会場

の入口で、今回のワークショップのひとつ「ハムラ・レックスをつくろう！」が実施された。辻氏制作の木製の恐竜の素体にメッセージを記入したうろこを取り付けていく自由参加のプログラムだが、午前は子どもたちの参加が多かったものの、午後になりライブの時間が近づくにつれ、大ホールホワイエは、LIFriendsのファンに埋め尽くされ、偶然開催されていたワークショップに彼らも次々に参加していくこととなる。恐竜のうろこにはリフレンズ解散に際しての、ファンたちの感謝のメッセージが数多く寄せられることになった。これは、音楽ホールを有する生涯学習センターならではの出来事であった。また、1階に展示された作品の前を多くのファンが横切り留まり、時に作品に目を向ける機会にもなった。ゆとろぎの日常に登場した作品との、彼らのまったく偶然の出会いは、自発的な訪問を必要とする美術館ではなかなか見られない光景であった。

このような興味深い状況の一方で、展示の日常の空間への埋没はひとつの課題となった。作品への接近禁止の結果・白線を最小限にしたことも相まって、展示があまりにもゆとろぎの普段の光景に溶け込み、期間を区切った特別なプロジェクトであるという見え方がなされにくい状況があった。多くの子どもたちにその展示の鑑賞効果をもたらすには、この会期中にゆとろぎに足を運んでもらい、意識的に展示個所を回ってもらう必要があったが、いつもそこにある展示ととられられたこと多かったのは否めない。会期途中から、看板やバナーによって展示の独自性をアピールする対応を行ったが、無料スペースであり、通路でもある場での展示でメッセージを伝えようとする難しさがあったのは確かである。造形ワークショップでは日常の素材を用いたが、非日常の制作体験を求める参加者や保護者の声も少なからずあった。

フリースペースで受付がないために来場者集計や満足度調査・効果測定の困難さもあり、今回は展示の客観的評価については正確に測定できていない。加えて、美術展示の専門機関・環境ではないことに起因する調整や運営の難しさは当然あった。22:00まで鑑賞可能な展覧会であり、夜間の照明の必要性があったものの、利用者の少ない場所は消灯するという公共施設としての省エネ方針があり、鑑賞者の申出で点灯することとなった。常時の監視員を配置できないなどの作品の安全確保の基準担保についてはある程度妥協しなければならないという実情もあった。

以上のような課題を残しつつも、美術館でも学校でもない生涯学習センターでの美術大学生の作品展示が、子どもたちの日常にアートを持ち込むこと、学生たちがアートを誰かの日常に持ち込むことの方法において、意義を持ったという実感は企画者として確実にあり、社会とアートのつながりを支える試みとして継続したいプロジェクトであった。

子ども体験塾実行委員会

子ども体験塾実行委員会事務局として携わり…

坂本 実咲

子ども体験塾実行委員会事務局

子ども体験塾「アートであそぶ夏休み！」の主催者として、武蔵野美術大学の皆様とともにプロジェクトの運営に携わり、沢山の関係者の協力のもと、無事に全プロジェクトを終えることが出来た。アンケートの結果から、いずれのプロジェクトも参加者満足度の高いものであることが伺えた。展示企画の「アートを遊ぶみんなの展覧会」では、羽村市生涯学習センター「ゆとろぎ」全館を利用してもらい、館内の至る所を武蔵野美術大学の学生らの作品で彩った。当館で通常実施する展示事業では飾ることが少ない高所な位置にも作品を展示し、当館利用者からは「毎年やってほしい」「館内が賑やかになった」などの良い意見を多数頂いた。

展示に関連した鑑賞プログラムでは、武蔵野美術大学の教授や学生から解説を直接伝えることで、参加者の作品への関心がより生まれたのではないかと感じた。

オリジナル恐竜作りのワークショップについては、子どもたちに材料選びから取り組ませ、想像力を育む良い機会となった。完成した作品は個性的なものばかりで世界に一つだけのミニ恐竜を手にして楽しそうに遊ぶ姿を見ることが出来た。

反省点としては、プロジェクト内容が盛り沢山になり、一つ一つの詳細な内容を詰め切れなかったところである。オリジナル恐竜作りの参加者からは、「チラシの写真的イメージで参加したが期待と違った。」と不満の声などもあり、子ども体験塾総合チラシ作成の段階から打合せの場を設け、具体的なワークショップ内容を詰めていき、実際のワークショップの作品により近いイメージ写真を掲載すべきであったと反省した。

今回、武蔵野美術大学と連携したことは、子ども体験塾実行委員会として新鮮な試みであり、勉強になることが沢山あった。この経験を活かし、今後も事業の企画運営に努めていきたい。

造形ワークショップ講師

ハムラレックスから見えたもの。
恐竜ワークショップを終えて

辻 蔭人

造形作家

僕が春原先生から今回のワークショップのお話を持かけられたのは、2月頃だったと思う。

その時聞いたのは、「夏休みに、小学生を対象にしてコミュニケーション要素に加えた造形ワークショップを行う」というものであった。

その時は何をテーマにしよう?と僕は考えなかった。夏休み、小学生とくれば答えは初めから決まっている。そう、恐竜である。そして恐竜には絶対に欠かせない要素が一つだけある。それはダイナミックさだ。

せっかく夏休みに恐竜のイベントに遊びに来たのに、机の上でチマチマ作ったり色を塗ったりでは面白くない。両手を広げても足りないサイズ感、からだ全体を使って楽しむワークショップ。その恐竜のダイナミックさを通して様々なコミュニケーションが生まれる。それが今回のワークショップの基本だった。

実物大の恐竜に参加者の想いを乗せたウロコを貼るハムラレックス。

不用品の山を探り、自分で恐竜を作りあげるワークショップ。

この2つのワークショップを通して、参加してくれた子供たちはよく話し、よく動いてイベントを楽しんでくれたように思う。特にコミュニケーションという点に関しては、当日スタッフとして参加してくれたムサビ学生の尽力もあり、予想以上の成功を見ることができたのではないだろうか。

一方で難しく感じたのは地域社会との交流であった。今回のワークショップを行うにあたって、羽村市のゴミ収集センターや、地元の製造業等に素材提供という形で協力をお願いしたのだが、日ごろ造形やらワークショップには触れないからか、理解の差が大きかったように思う。

アートや教育の範囲に留まらず、地域社会に対し開けたワークショップイベントをするにあたって、いかに外部の方に参画して頂くか。これは今後の大きな課題であると思う。

わかりやすく纏められた冊子や動画などで地域社会の方々の理解を得て活動の幅が広がれば、造形ワークショップも一時の子供向け工作イベントから多世代の総合的な学びとコミュニケーションの場へと変わってゆくかも知れない。

恐竜ワークショップで僕は、しばしば参加した子供と同じくらい盛り上がる親御さんの姿が見られたのに驚いた。ハムラレックスの体は子供だけでなく親子や大人が書いたメッセージで飾られた。価値観が多様化し、世代や地域社会の交流は薄れ、僕たちの社会は一層目まぐるしく変化している。しかしそんな時だからこそ、色々な人がフラットに参加できるワークショップにしかできない事があるのではないだろうか。

鑑賞プログラム講師

赤ちゃんとアートの出会いが育む、新たな学び

杉浦 幸子

武蔵野美術大学造形学部芸術文化学科教授

3から12ヶ月の赤ちゃんがアート作品やそれを取り巻く場や人に出会い、刺激を受ける場をデザインする「赤ちゃんとびじゅつかん」。これまで基本、美術館で実施してきたが、今回、多様な年齢とバックグラウンドの人たちが集まり、活動する「生涯学習の場」に持ち込んでみた。

9人の赤ちゃんと彼らを運ぶ親御さんたちと、館内に散らばる作品をゆっくり見て回った。赤ちゃんの目線でゆとろぎを捉えると、非常に雑多な刺激に満ち満ちた場となる。高い天井や窓の外の景色、集まった人たちからたくさんの中刺激がある1階では、作品以上に環境に大きく反応したが、天井が低く、落ち着いた2階に上がると、少しずつ作品に集中した。そして明るく開放的な3階では、リラックスしながら自分の気になる作品を注視し、運び手である親たちを作品へと誘った。

一人では動けず、大人の庇護が必要な赤ちゃん。しかし、彼らがアート作品と出会い、発する視線や動き、啞語は、大人たちに気づきを与えてくれる。生涯学習の場であるゆとろぎでの「赤ちゃんとびじゅつかん」は、最も年若い学び手である赤ちゃんとアートをつなぐと同時に、最も若い教育者である赤ちゃんから大人たちが刺激を受け、学ぶデザインであることを、いつも以上に感じさせてくれた。



鑑賞プログラム見学者・元羽村第三中学校教諭

赤ちゃんの存在が変えるもの

鈴木 齊

羽村市学習コーディネーター

赤ちゃんの声が響く。ファシリテーターの杉浦先生のトーンを落とした声が優しく語りかける。赤ちゃんを抱いたママやパパが最初は遠慮がちに、でも徐々にその空間を楽しみ始める。見守る者も私もきっと穏やかな気持ちでいる自分に気付いたに違いない。「ゆとろぎ」の展示空間に、新たな時間が加わった。

ムサビの「赤ちゃんアート塾」が開かれると知り喜んで参加した。生涯学習センター「ゆとろぎ」は、まさしく老若男女が集まる空間。ただし、3階の保育室や屋上の芝生を楽しむためにバギーを押した親子が訪ねている様子はよく見るが、展示空間を赤ちゃん連れが楽しむ姿にはあまり出会ったことはない。

一昨年、私の関わる「アートinはむら展」の鑑賞教室の時間に、偶然近くの保育園の小さな子たちがワゴンに乗せられて通りかかったので、声をかけて遠慮なく鑑賞してもらったことがある。隣の幼稚園児が屋上散歩に来た時には、思い切って急遽「対話による鑑賞」を試みた。幼児たちは興味の眼を見開いて、たくさん沢山楽しそうに話してくれた。その時の展示空間のこれまでに無い柔らかな雰囲気が気持ち良くて、毎年声がけをしていた矢先の「赤ちゃんアート塾」であった。

参加した5組の家族たちは、きっとこれまでアートに興味があり、でも「子育ての時期は我慢!」と決め込んでいたに違いない。最初はこっそりと動いていた親子も、杉浦先生のさりげない声掛けに乗せられて次第に積極的に画面に近づく。ソファのある空間では赤ちゃんを這わせてゆとりが出て来たように見え、ある親子が大きな鯨の絵に向かって3人だけで語り合っている姿がとても印象に残っている。何と素敵なお景!

「ゆとろぎ」側も初めてと思われる試みに、普段は開けていないドアをフリーにして移動を容易にするなど配慮が伺えた。赤ちゃん連れにも鑑賞の機会を企画することは、生涯学習施設としてより幅を持つことになるだろう。赤ちゃんの時期から鑑賞を始められるファミリーは、途切れること無くアートを永く楽しむことができるに違いない。より身近にアートを感じ家庭でも会話が生まれるだろう。あの時間「ゆとろぎ」に、赤ちゃんを中心とする大人達の和やかな空間が出来上がっていたのは確かだ。子どもたちへの鑑賞の機会を、更に保障していきたいと確信できる機会であった。

学生スタッフ

展示・撤収作業に参加して

飯盛 翔太

武蔵野美術大学造形学部芸術文化学科学生

作業に参加して感じたのは、責任の重さが想定の10倍ほどもある、ということだった。

ただ、作品を所定の位置に運び、箱から出し、左右のバランスをとり、かけるだけ。口で言うのは簡単だが、思ったよりこれが難しい。

箱から出すのにもまず、作家の梱包の仕方に従って丁寧にとりだし、作品が傷つかないようゆっくりと置く必要がある。梱包材は作品をお返しするときにもう一度使うため、ビリビリに破いて…なんてことは絶対にしない。丁寧に置んで、丁寧にしまうのである。

箱から出す作業だけでも、こんなにも工程があり、最大限の配慮をする必要がある。他人の作品を扱うという責任は、それほど重たいものなのである。その他の作業なんて、これの比ではないことなどすぐにわかるだろう。

その分だけ学んだことはたくさんある。一連の流れの体験はもちろんだが、なによりも、「少しも妥協できないし、しない。」という感覚を得られたことが私にとって一番大きいものであった。

例えば、ある作品の高さが他のものと1センチ違っていた場合、鑑賞者の無意識のうちにズレを感じ取ってしまう。なにか気持ち悪くなる。ただ、それらがピッタリと合った時、感動と心地よさが入り混じったような感覚を感じさせることができる。そんな仕事ができた時の達成感と充実感は、忘れられないだろう。

学生スタッフ

展覧会の裏方作業を経験して学んだこと

芹田 美羽

武蔵野美術大学造形学部芸術文化学科学生

私は、展示設営と撤収作業に参加した。まず搬入作業はトラックに積んである作品を館内に運ぶ作業から始まり、作品の大きさによっては、運搬に複数人を必要とする場合もあった。重労働でしかも作品が欠損しないように神経を使う作業で、一日を通してとても大変だったことを覚えている。次に、グループを組んでワンフロアの展示作業に取り掛かった。初めのうちは、どのように動けば効率的に作業することができるのか掴めず、棒立ちになってしまふことが多い多々あったのだが、作業の手順をグループで話し合って作業していくうちに、徐々に手際良く動くことができた。それと同時に、作業中はグループ内でコミュニケーションを交わすことが欠かせないと学んだ。

今回の展覧会の会場となった羽村市生涯学習センターゆとろぎは、片面が全面ガラス張りの建物だ。したがって、どの階の展示作品も外からある程度鑑賞することができる。通行人の興味関心を引き出すことのできる宣伝・広報に長けた環境だったと思う。私は、今回初めて展示設営と撤収作業を体験したのだが、来場者と作者、さらに会場を繋ぐ役目を果たしたのだと思うと、大きなやりがいを感じた。

学生スタッフ

誰も知らないアートの楽しみ方

大西 瑞夏

武蔵野美術大学造形学部芸術文化学科学生

この展覧会で私は展示とギャラリートークに参加した。展示では1階を担当した。いつもより大きな作品を取り扱ったので、作品への違いと作業量が多く、最後まで気が抜けなかった。しかし、作業時に作品を間近で鑑賞することができたのは貴重であった。

ギャラリートークでは「52Hz」という作品について話した。私はもともと制作活動をあまり行わないで、参加者と近い距離にあった。だから技法や作者の意図よりも、私はまず素直な感想と疑問をいうことで参加者に刺激を提供できるように意識した。そして参加者自身が目の前の作品について考えられるようにした。この後、実際に製作者が登場したが、参加者にとってより作品を見る目がまた変わり、内容の濃い企画となった。

「誰も知らないアートの楽しみ方」とはなんだろう？それは「鑑賞者それぞれのアートの楽しみ方」である。一つの作品に対して人のいる数だけ、考えがある。だが、大抵の人はそれに気づかずに「分からない」「知らない」で終わるのが現状だ。ここで私たちが「分からない・知らない」壁を崩すと、アートの本質に鑑賞者が近づけるのではないか。今回の展覧会に参加して貴重な体験と新たな問いに出会うことができた。

学生スタッフ

笑顔から生み出された恐竜

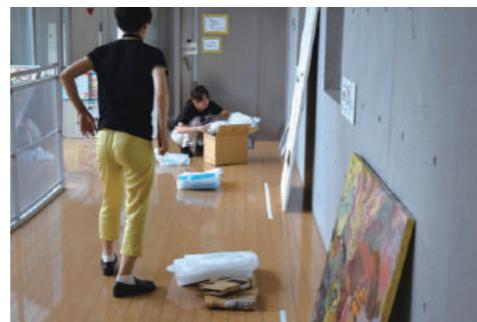
侯 米蘭

武蔵野美術大学大学院修士課程造形研究科美術専攻藝術政策コース学生

今回「自分だけのオリジナル・ミニきょうりゅうを作ろう」というワークショップにボランティアとして参加した。子ども向けのワークショップに参加した経験はあるが、今回の最大の違いは、緊張している子どもがほとんどいなかつたことである。子ども達は積極的にオリジナルのミニキヨウリュウを作り、とても楽しそうに恐竜を作っていたのである。

このように気軽に子どもたちが楽しめたのは、子ども達に自由の創作の空間を与え、作業の流れを分かり易くした点ではないだろうかと思う。今回のイベントの創作スペースは広く、子ども達にとって自由な創作空間を広く提供したのである。参加者を三組のグループに分け、各組の中央に道具ゾーンを設け、ボランティアの人が立ち、子ども達へのアドバイスと同時に安全性を確保したのである。また子ども達の親は囲うように子どもの進捗を見ることができ、統一感と安心感を生み出した。子ども達が主体的に動いたり考えたりすることができたからこそ、それぞれ優れたオリジナル・ミニきょうりゅうを作ることができ、家族みんなで楽しい経験を共有することができたのである。

今回のワークショップは自分にとってとても良い学びであった。



子どもが持つ創造力を引き出す、 ファシリテーターの役割について

寺本 格

武蔵野美術大学造形学部芸術文化学科学生

今回、アーティストの辻藏人氏が企画した造形ワークショップにファシリテーターとして参加し、子どもが持つ豊かな創造力を育むための、ファシリテーターの重要な役割について学ぶことができた。

このワークショップの参加者は小学校1年生から5年生で、内容としては普段ならば捨ててしまうようなプラスチック製容器や紙製の空き箱などを組み合わせることでオリジナルの恐竜をつくるというもので、接着の道具としてはセロテープやグルーガンを使うことができるものであった。

「セロテープを使う」と簡単に言っても、子どもにとってその使い方は多様なものが考えられることを今回のワークショップから知ることができた。

本来の接着のためにセロテープを使うだけではなく、まるで装飾の紐であるかのように巻きついている子どもが見受けられ、そこには子どもが持つ発想の柔軟性を感じざるを得なかつた。

子どもたちが作る恐竜は三者三様で、例えば洗濯バサミを恐竜の頭に見立てたり、針金の柔軟性を活かして頭を開閉式に加工する作品には大変驚かされた。他にも恐竜の頭部、胴体、脚部を忠実に表現しようとする子どもや、反対に身体の構造に拘らず、個性的な恐竜を表現する子どもも見受けられたのが印象的であった。

他にもグルーガンの特性を活かして蜘蛛の巣のような作品を作る子どもが見受けられた。一見するとそれは恐竜を作るテーマとはかけ離れているように感じられるだろう。

しかしここで重要なことは目的に沿った作品を完成させるように指示を出すことではなく、寧ろ子どもが自主的に発想し試みようとしたことを促進し、手伝うことが重要なのだと思う。

これはfacilitateという言葉が持つ「促進する」「円滑にする」「手助けする」という意味からもファシリテーターの役割が、ただ目的を達成するために指導することではないと考えることができるだろう。

子どもが、ワークショップ企画者の想定を超えるような意図しない行動をすることは良くないことではなく、予測通りにいかないからこそ、新たな見地が参加者、企画者の双方に生まれるのだろうと思う。

したがってワークショップにおけるファシリテーターの役割としては、主に道具の扱いに危険がないように注意して見守ることも重要だが、その他にも子どもが持つ創造力を促進させるように接していく役割があることを学んだ。この経験を今後へ活かしていきたいと強く思う。

生きる空間

北嶋 勇佑

武蔵野美術大学芸術文化学科研究室助手・版画家

光が燐々と降り注ぐガラス張りの建物を彩る作品たちは、美術館での静の雰囲気とは違う、動を感じた。二つの立場として関わることになった本展覧会であるが、総じて活気あるものになったのではないだろうか。

まず、助手としての関わりは主にパネル製作、搬入出、展示作業の実作業である。搬入設営はキュレーションを行う春原先生のプランのもと、有志の学生と一緒に行ったが、限られた時間の中で設営を行う事に、学生の焦りも見えた。加えて、実技経験の浅い学生は梱包の解き方一つとってもおぼつかない。梱包材の扱い、テープの切り方などは普段授業で学ぶ内容とは違うわけだ、自然である。

出品者も学生であるから、梱包はざくばらんに紙で包まれただけのものから、開けやすいように手間暇をかけて梱包しているものまでばらつきがある。助手として助言をしつつ、少し落ち着き、視野を広くすると、梱包一つとっても作家の作品に対する意識が見えてくる。それを汲み取りながら作業を行うと、作品の物理的に壊れやすい箇所や、見せたい箇所（梱包が一部分丁寧など）が見えてくる。ただアルバイトのように言われた事を行うのではなく、作品の見せたいところを意識する事で、学生はある意味一番至近距離で作品を鑑賞するわけで、必然的に作業は丁寧になって行く。作品に対する意識の変化が見える搬入となった。

作家として版画作品を展示する機会でもあった。吹き抜けのエントランスに大作、少し影になっている場所に小作品、元々公衆電話がおかれていた場所（今は撤去されて何もない空間）に公衆電話を描いた作品を展示したり、遊びごろを入れた展示ができた。来場者に配るワークシートにも、この作品はどこにあるかな、などのクエスチョンがあり、作品を見せつけるのではなく、鑑賞者が主体となって探す見方も面白いと思った。これは作品が展示室ではなく、館内の廊下やフリースペースに展示する企画だからできた事であろう。

老若男女の様々な世代が利用する施設であり、展覧会を見に来た方以外にも、偶然の出会いがあったのではないだろうか。私も何度か会場に足を運んだが、小学生あたりの年代の子どもが放課後の遊び場のように利用していたのが印象に残っている。

子どもが活気ある空間に作品を出すことができたのは喜ばしいものであった。美術館に足を運ぶ機会が少ない層にも、生活圏にアートが入り込むことで、創造力の幅を広げることができたのではないかだろうか。少しでもそのきっかけになれたなら作家として本望である。お互い今を生きるもの同士、同じ場所で刺激しあえる関係をこれからも続けて欲しい。

美術大学の社会貢献について

板橋 孝浩

武蔵野美術大学大学企画グループ社会連携チーム

教育と研究を本来的な使命としてきた大学に、「社会貢献」の役割が強く期待されるようになり始めてからしばらく経つ。

本学は、美術・デザインの専門大学として、その専門性を活かした教育・研究成果等を社会に積極的に還元し、文化の創造発展と社会貢献に寄与することを、社会連携活動ポリシーの基本方針としている。その中でも特に、幼児教育と初等中等教育、特別支援教育を対象とするワークショップ等の取り組みは、美術教育普及・振興プロジェクトとして本学が永く推進してきているものである。

今回の「アートを遊ぶみんなの展覧会」は、羽村市教育委員会からの依頼を受け、地域の教育・学術、文化の向上を図るために、小中学生を対象として実施したプロジェクトである。夏休みの時期に合わせて展覧会、ワークショップ等を実施し、体験してもらうことで、子どもたちのアートへの興味を促し、知的好奇心を喚起することを目的としている。

プロジェクトの企画・運営は、芸術文化学科が中心となって進められたが、展示される学生作品は、ファインアート系の日本画、油絵、版画研究室より選出され、大学として実施する初等中等教育向けプロジェクトとしては、規模の大きなものとなった。素材やモチーフなど、表現方法が異なるさまざまなアート作品を子どもたちに見せることができ、前述の目的をある程度果たせたのではないかと思う。

このような結果を残すことができたのは、大学単独ではなく、企画段階から大学と教育委員会が連携しながら進めてきたことが大きな一因であると考えている。例えば、教育委員会であれば「地域にいる小中学生にどのような体験をしてほしいか」、大学であれば「作品を制作する学生にとって、公共施設で行う展覧会がどのような経験になるか」など、異なる立場でありながら、お互いに意見を出し合って作り上げた本プロジェクトは、理想の連携のあり方だったように感じている。

今後、より良いかたちへつなげていく方法としては、現場の学校との連携強化が挙げられる。教育委員会を中心に大学と学校が協力をし、展覧会やワークショップ等を具体的なカリキュラムや指導方法に関するプログラムに落とし込む、大学と学校を行き来できるような仕組みを作り、学生と生徒、教員同士の交流を行うなど、さまざまな可能性を秘めているのだろうか。

「社会貢献」という言葉の意味やそのあり方について、大学としての明確な答えを未だ出せていないところもあるが、今回のような自治体や企業との共同プロジェクトを通じて、美術大学がいかに社会に貢献できるかを考え続けていきたい。

アートの遊び方を提案する展覧会

佐久間 茜

武蔵野美術大学大学企画グループ社会連携チーム
本プロジェクト広報・印刷物デザイン担当

「アートを遊ぶみんなの展覧会」で特徴的だったことは、作品をその場に展示するだけでなく、多様なアートの「遊び方」を提案したということだ。

展覧会には日本画、油絵、版画研究室から40点に及ぶ作品が出展された。出展作品に共通のテーマや条件は設定されていない。今回の展覧会が主に小中学生を対象にしていることは出展学生に対して事前に伝えられたが、そのうえで作品のセレクトは学生に委ね、多様な作品が集まつた。子ども向けの展覧会というと、子どもにとって親しみやすいと思われる作品が並んでいることをイメージしそうになるが、今回出展された作品にはそのような括りもない。だからこそ「来場者と展覧会をどうつなぐか」「どのように作品をみせるか」がこの展覧会のポイントであったと感じる。

その手立てとして今回、作家から子どもたちへ向けたメッセージの展示や、ワークショップ、ギャラリートークなどの企画が実施された。そして、会期を通じて配布されたのが「みんなのための遊び方ガイドブック」である。会場を訪れた来場者がガイドブックを見ながら作品を鑑賞していくことを想定しており、鑑賞のポイントや注意などがまとめられている。さらにガイドブックは自由に書き込みができる形式になっていて「お気に入りの作品を見つけよう」「よくわからなかった1点をみつけよう」「展覧会に新しいタイトルをつけてみよう」などの質問に答えていくことで、自分なりの展覧会の楽しみ方を見つけてもらうことを目指した。実際に多くの小中学生がガイドブックを片手に会場をまわってくれた。

このような取り組みのなかで、来場者と教員や学生が交流する機会を持つこともでき、様々な角度から展覧会や作品の見方や楽しみ方（=遊び方）を提案できたのではないだろうか。初の試みということで今回は手が回らなかった部分も多かったが、大学と教育委員会が連携し、市民に馴染みのある地域の施設で実施する企画として、より様々な発展の可能性もあるだろう。



謝辞

本プロジェクトの実施にあたり、
下記の各位・団体のご協力を賜りました。
記して御礼申し上げます（敬称略）。

鈴木 齊
多摩イシバシ株式会社
羽村市リサイクルセンター

武蔵野美術大学造形学部日本画学科研究室
武蔵野美術大学造形学部油絵学科油絵研究室
武蔵野美術大学油絵学科版画研究室

.....
アートを遊ぶみんなの展覧会
アートであそぶ夏休み！×ムサビプロジェクト2019
記録冊子

編集：春原 史寛・佐久間 茜
デザイン：佐久間 茜
作品写真撮影：赤羽 佑樹

発行：武蔵野美術大学 2020年3月



MAU